

## 「北海道150年事業関連企画～MIT石井裕教授を北大に迎えて」を開催 札幌キャンパスを駆け抜ける ー北海道マラソン2018ー 平成30年度オープンキャンパスを開催

お知らせ

・総合博物館へのご寄附について



## ■ 全学ニュース

- 1 「北海道150年事業関連企画～MIT石井裕教授を北大に迎えて」を開催
- 4 札幌市と国際会議等（MICE）に関する連携協定を締結
- 4 名和総長がインド工科大学ハイデラバード校及びボンベイ校他を訪問
- 5 KDDI × 北海道大学 中学生向けサイエンススクール「五感で感じる南極体験」を開催
- 6 札幌キャンパスを駆け抜ける -北海道マラソン2018-
- 7 北大フロンティア基金
- 9 平成30年度オープンキャンパスを開催
- 10 「北海道大学進学相談会」を東京で開催
- 11 平成30年度北海道大学鈴木章記念賞 -自然科学実験- 被表彰者の決定
- 11 平成30年度小島三司奨学金受給者の決定
- 12 平成30年度中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業を剣淵町で実施
- 13 2018年新渡戸スクールメンターフォーラムを開催
- 14 高等教育推進機構日本語研修コース修了式(2018年4月入学者)
- 15 高等教育研修センターにて各研修等を開催
- 18 イノベーション・ジャパン2018に出展
- 19 第4回食科学プラットフォームセミナー「海藻資源の新たな活用」を開催
- 20 「ウラジオストック航海」に本学学生が参加
- 21 国際連携研究教育局（GI-CoRE）量子医理工学グローバルステーションが第1回放射線生物サマースクール及び第5回医学物理サマースクールを開催
- 22 国際連携研究教育局（GI-CoRE）と遺伝子病制御研究所（IGM）が合同シンポジウムを開催

## ■ 部局ニュース

- 23 「学生相談総合センター」看板上掲式を挙行
- 24 学芸員リカレント教育プログラム特論 装飾するギャラリートークと舞台芸術「アートが紡ぐ古代の物語」を開催
- 25 夏の礼文島で考古学調査の国際フィールドスクールを開催
- 26 教育学部でESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム2018（夏季北大プログラム）を開催
- 27 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「アジアと向き合う -温故知新-」が終了
- 28 法学研究科でサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題-特許法をめぐって-」を開催
- 28 法学部同窓会寄附講義「Be ambitious 2018」を開講
- 29 公共政策大学院が「地方公務員向け・地方議員向けサマースクール」を開催-地方創生について討議-
- 30 薬学研究院で「第12回薬学研究院研究発表会」を開催



北海道150年事業関連企画～MIT石井裕教授を北大に迎えて



札幌市と国際会議等（MICE）に関する連携協定を締結

- 31 薬学研究院で「The 4<sup>th</sup> Japan-Taiwan Joint Symposium for Pharmaceutical Sciences」を開催
- 32 農学院・農学部及び国際食資源学院がシンガポール国立大学との「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」～Agriculture as a domestic culture & industry in a new globalization era～を開催
- 33 農学院で「留学生オリエンテーション」を開催
- 34 「第1回東アジアイノベーション促進フォーラム～The 1<sup>st</sup> Korea-China-Japan Joint Symposium 2018: Creating Value Through Interdisciplinary Collaboration for the 4<sup>th</sup> Industrial Revolution～」を開催
- 35 初代忍路丸船名板を水産学部で受贈
- 35 水産科学研究院でひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～「これが意外とムズカシイ！海岸動物の社会関係」を開催
- 36 北大農場公開2018「ロボットトラクタ未来農業～ロボットたちが待っている、ちょっと未来を感じよう！～」
- 37 電子科学研究所で物質・デバイス領域共同研究拠点活動報告会及びダイナミック・アライアンス成果報告会を開催
- 38 第5回北極域オープンセミナーを開催
- 39 東海林力蔵関係資料を大学図書館で受贈

## ■ お知らせ

- 40 総合博物館へのご寄附について

## ■ レクリエーション

- 42 平成30年度学内バレーボール大会の開催
- 43 教職員テニス大会の開催

## ■ 学内規程 49

## ■ 研修

- 49 平成30年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修

## ■ 表敬訪問 50

## ■ 人事 50

- 51 新任教授紹介
- 51 新任部課長等紹介

## ■ 訃報

- 52 名誉教授 三谷 鉄夫 氏
- 52 名誉教授 石井 忠雄 氏



KDDI×北海道大学中学生向けサイエンススクール



平成30年度中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業



「学生相談総合センター」看板上掲式



初代忍路丸船名板を水産学部で受贈

表紙：平成30年度オープンキャンパスを開催（関連記事9頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景® 初冠雪を迎えて

## ■ 全学ニュース

# 「北海道150年事業関連企画～ MIT石井裕教授を北大に迎えて」を開催

8月6日（月）・7日（火）の2日間、本学卒業生であり、マサチューセッツ工科大学（MIT）メディアラボ副所長である石井 裕教授をお招きし、デジタル化資料へのアプローチを探るワークショップ、米国スタンフォード大学、豪州シドニー工科大学、本学の研究者と研究論を語るシンポジウム及び若者に向けて人生論を語る特別講演会の3つのイベントを開催

しました。これは、北海道150年事業に合わせて来道する石井教授に、出身校である本学で講演いただくこととなったものです。石井教授が講演するいずれのイベントでも、本学教職員・学生のみならず、一般の参加者や道内他大学の学生の参加もあり、大変な盛況となりました。

（国際連携研究教育局）



シンポジウム遠景

### 「デジタルアーカイブが紡ぐ未来：MIT石井裕教授と考える未来記憶」

8月6日（月）、学术交流会館第一会議室において、MIT石井教授を迎えて標記ワークショップを開催しました。

講演者として石井教授のほか、情報基盤センターから重田勝介准教授、総合博物館から山下俊介助教が登壇しました。

最初に石井教授の講演があり、次に重田准教授、山下助教から、附属図書館、博物館、文書館でのデジタルアーカイブに関する取り組みについて紹介

がありました。その後、講演者3名によるパネルディスカッションおよび質疑応答が行われました。

本ワークショップには学内外から200名以上の参加があり、終了後のアンケートでは、特に石井教授の講演について「極めて刺激的だった」「新しい視点が得られた」「今後の自分の生き方を深く考えることができた」等の意見が寄せられました。

（附属図書館）



質問に答える石井教授

### 「第2回GI-CoRE GSQ, GSB, & IGM合同シンポジウム：量子、情報科学、生物学、医学」1日目（関連記事21～22頁に掲載）

国際連携研究教育局（GI-CoRE）の量子医理工学グローバルステーション（GSQ）、同ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバルステーション（GSB）及び遺伝子病制御研究所（IGM）が中心となり企画した本シンポジウムは、今夏第2回目の開催に至りました。今般は、MIT石井教授を特別ゲストに迎え、GI-CoRE教員としてクロスアポイントされている、米国スタンフォード大学のレイ・シン教授、豪州シドニー工科大学のプリヤダールシ・ナンダ准教授、情報科学研究科兼GI-CoREの宮永喜一教授、理学研究の前田 理教授、遺伝子病制御研究所の廣瀬哲郎教授、医学研究院の南保明日香准教授を迎え、特別講演とパネルディスカッションを開催しました。

名和豊春総長と、来賓である文部科学省高等教育局信濃政範審議官の挨拶の後、笠原正典理事・副学長の司会進行により開始したシンポジウムでは、TEDxSapporo\*イベントを手がける舞台製作クルーに協力を得て、会場となったフロンティア応用科学研究棟（鈴木章ホール）は本格的なライティングとステージ設営で、プレゼンテーションの演出が行われました。

午前の部では、初めにシン教授が『Artificial Intelligence in Medicine: Past, Present, and Future（医学における人工知能：過去、現在、そして未来）』を、次いで石井教授が『TRANSFORM: Envisioning the Future（トランスフォーム：未来を創る）』を、最後に前田教授が『Drawing, Analyzing, and Using

the Route Map of Chemical Reactions（化学反応経路地図の製図、解析、利用）』の講演を行い、その後、この3人の講演者にナンダ准教授を加えて、宮永教授の司会の下、国際連携教育、異分野融合研究を語るパネルディスカッションを開催しました。

午後の部では、医学研究院兼GI-CoREの小野寺康仁講師の司会進行により、廣瀬教授が『Ancient and Modern RNA Worlds（古代と現代のリボ核酸（RNA）世界）』を、南保准教授が『Visualizing Virus-Host Interaction（ウイルス-宿主間相互作用の可視化）』の講演を行いました。最後に医学研究院兼GI-CoREの白土博樹教授が、医学・情報・理学・遺伝子学といった幅広い分野をカバーした5つの

講演とパネルディスカッションの総括を行い、同シンポジウムの1日目が終了しました。参加者数は、延べ300名を超え、いずれの講演にも、情報科学研究科や医学研究院の教員、留学生、本学サマースクール参加の若手外国人研究者、札幌近郊私立大学の学生等、様々な層から活発な質問がなされました。

\*TEDxSapporoとは：1984年に米国の非営利団体TEDが「Ideas worth spreading（広める価値のあるアイデア）」という考え方をもとに、プレゼンテーションイベントを開催したことをきっかけに、世界各国でTEDxというコミュニティが組織されてき

た。TEDxSapporoは、札幌で2012年以降、毎年スピーチカンファレンスを開催している。<https://tedxsapporo.com/about/>

(国際連携研究教育局)



名和総長



文部科学省信濃審議官



スタンフォード大学シン教授



MIT石井教授



前田教授



廣瀬教授



白土教授



パネルディスカッション



南保准教授

### 「独創・協創・競創の未来」

8月7日(火)、高等教育推進機構において、MIT石井教授による特別講演会「独創・協創・競創の未来」を開催しました。

本講演会は高等教育推進機構のN1教室をメイン会場として行われ、同機構のN2教室へもリアルタイムで特別

講演会の動画を配信しました。

特別講演会は、山口淳二副学長の司会により開会し、最初に高等教育推進機構長である長谷川晃理事・副学長から挨拶と石井教授の略歴紹介が行われました。

続いて、石井教授の特別講演が行わ

れ、北海道で育ち、本学で学び、現在アメリカを中心に国際社会で優れた活動を行っている教授自身の学生生活やこれまでの研究生活などを通じた体験談をもとに、「出杭力・道程力・造山力」など石井教授独自の言葉で分かりやすく表現されました。

講演会終了後、山口副学長の司会により質疑応答が行われ、石井教授はメイン会場であるN1教室の聴講者だけでなく、N2教室からの質問にも答えるなど、予定時間を大幅に超えて多くの質問に精力的に答えてくださいました。

その後、聴講者全員と記念撮影をするとともに、希望者からの個別の質問や記念のサインにも気さくに応じ、聴講者との交流を深められました。

本特別講演会には両会場合わせて314名の参加者があり、メイン会場では終始立ち見が出る盛況の会となりました。講演いただいた石井教授にはここに改めて感謝申し上げます。

なお、本講演の一部始終は本学オープンコースウェアで公開予定となっています。ぜひご覧ください。

(学務部学務企画課)



司会進行する山口副学長



開会の挨拶をする長谷川理事・副学長



石井教授



会場の様子

## レセプション

全イベント終了後に、イベントの関係者が一堂に会したレセプションを開催しました。在札幌米国総領事館のレイチェル・ブルネットーチェン首席領事をお迎えしたほか、石井教授が学生時代を共に過ごした本学教員・同窓生も参加して、華やかな会となりました。首席領事からは、米国で活躍する石井教授をはじめ、国際連携研究教育局（GI-CoRE）において本学と米国が数年にわたり連携しており、その中には領事の母校であるスタンフォード大学からの研究ユニットも含まれていることに触れ、二国間で双方向の強固な協力関係がつけられていることを認識したとの話がありました。

レセプションでは、GI-CoRE量子医理工学グローバルステーションを代表してスタンフォード大学のクウインズ・ファン・リー教授から、また同ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバルステーションを代表してシドニー工科大学のプリヤダルシ・ナンダ准教授から、記念すべき2回目の合

同シンポジウムが成功裡に終わったこと、今後の協力を深化させることについて挨拶がありました。

最後に、本イベントに多大なる尽力をいただいたMITの石井教授からの挨拶に続き、名和総長より石井教授に

本学のロゴが刻印された時計が贈呈され、レセプションは盛会の内に終了しました。

(国際連携研究教育局)



ブルネットーチェン首席領事



スタンフォード大学リー教授



シドニー工科大学ナンダ准教授



名和総長（左）と石井教授（右）

## 札幌市と国際会議等（MICE）に関する連携協定を締結

9月4日（火）、本学は札幌市と国際会議等（MICE）の誘致・開催に関する連携協定を締結しました。

MICE（マイス）とは、「Meeting」（企業等の会議）、「Incentive Travel」（企業等の行う報奨・研修旅行）、「Convention」（国際機関・団体及び学会等が行う国際会議）、「Exhibition/Event」（展示会・見本市及びイベント）の頭文字を合わせた言葉であり、多くの集客交流が見込まれるビジネスイベントなどの総称です。

札幌市には、本学との連携を深めることで、同市へのMICE誘致を推進したいとの意向があります。また、本学としても札幌市におけるMICE誘致推

進をリードする役割を果たすことで、地域創生に寄与するとともに、国際広報に関して同市と相互に連携・協力することにより、本学の国際的なブランド力を強化したいと考え、本協定締結の合意に至りました。

締結式は札幌市役所で行われ、名和豊春総長及び秋元克広市長による協定書への調印と代表者挨拶が行われました。

協定による具体的な取り組みとして、本学で開催された会議等についての定期的な情報共有や、本学が誘致・開催する国際会議等に関する相談窓口の設置、国内外で開催される国際会議や国際的行事等における相互の広報PR

活動の協力等が予定されています。

本協定の締結を機に、本学及び札幌市の国際的ブランド力の強化に努めるとともに、地域創生への更なる貢献を目指して参ります。

（国際部国際連携課）



協定書を手に握手する名和総長(左)と秋元市長(右)

## 名和総長がインド工科大学ハイデラバード校及びボンベイ校他を訪問

8月13日（月）・14日（火）の2日間、名和豊春総長、大鐘武雄情報科学研究科教授らがインド南部のハイデラバードおよびムンバイを訪問しました。

今回の訪問は、本学及びSTSIプログラム（平成29年度の世界展開力事業として採択された「持続可能な輸送システムと社会インフラ構築のための国際共同研究力育成プログラム」）等のPR、また、インドの高等教育事情に関する情報収集等を目的としたものです。

13日（月）には、まずインド工科大学ハイデラバード校（IITH）にてJICA長期専門家として派遣されている片岡広太郎准教授と面談し、現地の建設・開発状況、日本との共同研究や

人材交流、日本企業との連携等について情報交換を行いました。

次に、同校のデサイ学長を表敬訪問しました。名和総長から、人工知能、IoT、ビッグデータ関係での連携について具体的な提案を行ったところ、デサイ学長から強い協力の意思が示され、実現のための外部資金獲得を含め検討していくこととなりました。併せて、STSI等を通じた学生交流について、より一層推進していくことを確認しました。

続いて、インド情報科学大学ハイデラバード校（IIITH）のナラヤナン学長を表敬訪問し、双方の大学の取り組みについて紹介し、意見交換を行いました。

14日（火）には、インド工科大学ボンベイ校（IITB）のカーカル学長を表敬訪問しました。名和総長から、STSIを通じた学生交流の推進、今後需要がさらに増加する見込みの鉄道関連の人材交流の拡大、日本からインドへの大学訪問（さくらサイエンスプラン）に対するインド政府からの支援、SIやLSを通じた教員交流の推進等について提案を行ったところ、カーカル学長は前向きな協力を約束しました。

今回の訪問を契機に、各校との具体的な交流がより一層前進することが期待されます。

（国際部国際連携課）



IITHのデサイ学長を表敬訪問



IIITHのナラヤナン学長を表敬訪問



IITBのカーカル学長を表敬訪問

## KDDI × 北海道大学 中学生向けサイエンススクール 「五感で感じる南極体験」を開催

本学とKDDI株式会社北海道総支社は、8月17日（金）、本学低温科学研究所において中学生向けのサイエンススクール「五感で感じる南極体験」を開催しました。

低温科学研究所の教員による講演では、青木 茂准教授から、氷山と海水の違いなどについて、実験を交えながら説明がありました。また、杉山 慎教授からは、南極での生活や研究機材などについて解説があり、参加した中学生達は実際の機材に興味を示し、間近で見て触れていました。

飯塚芳徳助教の案内により、低温科学研究所の $-50^{\circ}\text{C}$ の低温室を体験した中学生達からは、「宿題の作文に活かしたい」といった声があがっていました。

第54次日本南極地域観測隊越冬隊員だった大越崇文氏による講演の中では、リアルタイムで南極昭和基地と交信できるコーナーもあり、中学生達は

基地での食事などについて活発に質問していました。最後には、南極の氷が全員に配られ、中学生達はその場で融かした氷から数万年前の空気が出す音

を聴く体験もしました。

（低温科学研究所，総務企画部広報課）



杉山教授から研究機材の説明を受ける参加者



$-50^{\circ}\text{C}$ の低温室で氷を切る実験



南極昭和基地の越冬隊員に質問する参加者



南極の氷が融ける音を聴く様子

## 札幌キャンパスを駆け抜ける ー北海道マラソン2018ー

「北海道マラソン2018」が8月26日（日）に開催され、さわやかな秋の風を受けながら、男女15,980人<sup>\*</sup>のランナーが本学札幌キャンパスを駆け抜けました。

ランナーたちはレース終盤の38km付近から本学構内に入り、緑あふれるメインストリートを通り、クラーク像を右手に眺めつつ中央ローンの木陰を通り、札幌農学校時代の正門を移設した南門からゴールの大通公園を目指しラストスパートを駆けて行きました。

2009年大会からコースに加えられた本学キャンパスには大勢の市民が駆けつけ、その温かい声援や激励が気力を振り絞り力走する選手たちを後押ししました。

なお、本マラソンの様子は、UHB・北海道文化放送とBSフジで生中継されました。

<sup>\*</sup>フルマラソンの出場者数

（総務企画部広報課）



メインストリートを疾走する選手達



総合博物館前の給水所



男子優勝の岡本直己選手



女子優勝の鈴木亜由子選手

# 北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報  
基金累計額（8月31日現在）

22,896件 4,557,364,830円

## 8月のご寄附状況

法人等9社、個人名の方々から38,234,500円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

### 寄附者ご芳名（法人等）

大塚製薬株式会社、医療法人耕仁会、塩野義製薬株式会社、大成建設株式会社、月島食品工業株式会社、医療法人萬田記念病院、医療法人社団リラ整形外科クリニック

### 寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	会田 和男	青木 清	青木 伸	秋山 友宏	愛宕 義浩	安達 昌昭	池田 慎
石井 孝久	石金 朋人	石田 君子	石田 秀一	石山 達雄	伊集 唯行	伊東 則昭	伊藤 博夫
井上 聡子	井上 勝六	井上 豪	今田 忠司	入宇田能順	入澤 秀次	上野 倫彦	内田 文雄
梅津 邦夫	浦澤 一史	海老塚冬衛	大嶋 卓	大西 静子	岡田 弘	奥富 俊之	尾郷 賢
小田 哲大	小内 透	小原 嵐	小原 隆夫	小原 大和	鹿取 正道	金川 眞行	梶島 孝典
鎌谷 正文	河合 佳子	川上 博史	河本 充司	國原 孝	黒柳 雄二	小島 琢	小菅 高之
小玉 和郎	小松 雅樹	斉藤 久	境井 嗣人	坂田 稔	坂本 大介	桜井 謙介	櫻井 洋一
笹川 勝次	笹本 洋一	佐藤 孝雄	佐藤 守	佐野 将義	三升畑元基	塩満 正哉	志済 聡子
鳥田 泰栄	嶋田 幸雄	菅原 隆夫	杉江 和男	杉田健一郎	鈴木 章彦	鈴木 重統	鈴木 貴之
須田 浩太	須藤 修方	瀬波栄潤	園田 保男	高野 耕	高橋 尚子	高橋 冬彦	田中 洋子
谷岡 尚昭	垂水 正昭	辻 よね子	土家 琢磨	土屋 裕	寺澤 睦	戸田 純子	富田 文久
豊田 威信	鳥井 史彦	長瀬 俊彦	中塚 英俊	中野 記嗣	中村 哲司	中村 昌弘	長本 克義
中山 貞夫	中山 承代	名和 豊春	賛田 裕昭	西室 舜雄	野本 健	則近 彰	林 秀幸
原 正則	福井 博俊	福田 伸	福原 孝弘	藤本 泰幸	淵上賢二郎	逸見 勝亮	本間 研一
前田 博	政氏 伸夫	升光 法行	松沢 幸一	松田 隆	松谷有希雄	松原 謙一	松村 真司
水戸 泰紀	皆川 一志	皆川 吉郎	皆川 知広	宮下 隆幸	宮田 俊弘	宮田 信幸	村上 幸夫
村澤 容子	村花 宏史	柳川三千代	矢野根陽子	八幡 敬一	山口 悦郎	山下 勇	山田 秀司
山田 大隆	山田 恵	山田 雄三	山中 幹基	湯川 昌彦	卯 和順	吉沢 正道	吉田 広志
吉村 智洋	輪島 博明	和田総一郎					

## 銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

### （法 人）

塩野義製薬株式会社，医療法人萬田記念病院，医療法人社団リラ整形外科クリニック

### （個 人）

愛宕 義浩，石金 朋人，石田 君子，石田 秀一，井上 勝六，入宇田能順，大西 静子，尾郷 賢，小菅 高之，  
笹川 勝次，鈴木 重統，辻 よね子，林 秀幸，福田 伸，藤本 泰幸，本間 研一，山中 幹基，輪島 博明

## 感謝状の贈呈



小林真也 様（平成30年8月9日）

---

## ご寄附のお申し込み方法

---

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスして下さい。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

### ①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし，ご記入の上，基金事務室に提出してください。

### ②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

### ③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて，基金事務室にご持参ください。

申込書は，ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか，基金事務室にもご用意していますので，基金事務室にお越しただいてからご記入いただくことも可能です。

### ④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（北海道大学 百年記念会館内・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

## 平成30年度オープンキャンパスを開催

8月4日（土）から7日（火）までの4日間、札幌・函館の両キャンパスにおいてオープンキャンパスを開催しました。

期間中はおおむね好天に恵まれ、本学は大勢の参加者で賑わいました。

主に5日（日）に開催された「自由

参加プログラム」では、高校生だけでなく、多くの保護者や市民の方々が学部・学科紹介や研究室訪問に訪れました。

また、12学部等では実験や体験ゼミ等による「高校生限定プログラム」が主に6日（月）に開催され、参加した

高校生等にとっては大学における学びの一端を味わう貴重な機会となりました。

（アドミッションセンター）



来場者で賑わう様子



水産学部「自由参加プログラム」の様子



獣医学部「高校生限定プログラム」の様子

### 来場者数

	自由参加プログラム	高校生限定プログラム	部局等別合計
文学部	858	92	950
教育学部	394	103	497
法学部	909		909
経済学部	564	187	751
理学部	1,516	109	1,625
医学部医学科	440	194	634
医学部保健学科	1,095	149	1,244
歯学部	133	28	161
薬学部	1,060		1,060
工学部	1,136	342	1,478
農学部	754	164	918
獣医学部	690	44	734
水産学部	486	55	541
環境科学院	61		61
附属図書館（本館・北図書館）	1,689		1,689
総合博物館	6,773		6,773
国際連携機構	99		99
大学文書館	132		132
北大キャンパスビジットプロジェクト	260		260
進学相談会、特別修学支援室	551		551
高等教育推進機構		47	47
総合計〔人〕	19,600	1,514	21,114

## 「北海道大学進学相談会」を東京で開催

本学主催の「北海道大学進学相談会」を8月25日（土）に東京で開催しました。

本相談会は平成19年度に東京で初開催して以降、今年度で12回目の開催となります。

会場では名和豊春総長，長谷川晃理事・副学長をはじめ，各学部やアドミッションセンターの教職員，在学生等，合わせて70名超が高校生やその保

護者等への説明・相談に当たりました。

当日は，名和総長の挨拶を皮切りに，長谷川理事・副学長が本学の魅力について説明を行い，藤田 修アドミッションセンター副センター長による総合入試についての説明の後，山口淳二副学長による新渡戸カレッジの説明，学部紹介等を行いました。また，並行して，全12学部のブースや，在学

生との対話コーナー等において個別相談対応を行い，多くの高校生・保護者等がブースを訪れていました。

来場者数は過去最多の昨年度（1,203人）に次ぐ1,110人となりました。

10月7日（日）には大阪で開催します。

（アドミッションセンター）



全体説明で挨拶する名和総長



本学の魅力について説明する長谷川理事・副学長



総長・副学長と話そうコーナー



来場者で賑やかな会場内



学部相談ブースの様子



北大生と話そうコーナー

## 平成30年度北海道大学鈴木章記念賞—自然科学実験— 被表彰者の決定

この度、平成30年度北海道大学鈴木章記念賞—自然科学実験—の第1学期被表彰者4名を決定しました。

本表彰制度は、鈴木 章名誉教授のノーベル化学賞受賞を記念して平成23年に創設され、平成29年度から名称を「鈴木章科学奨励賞—自然科学実験—」から「鈴木章記念賞—自然科学実験—」とし、今回を含め50名の学生に授与されています。賞の内容は、第1年次学生が履修する全学教育科目「自

然科学実験」において、特に優秀な成績を収め、かつ本学の目指す全人教育の理念にふさわしい学生を表彰するものです。被表彰者は各学期3名程度、毎年6名程度で、高等教育推進機構長から賞状の授与及び記念品が贈呈されます。

なお、表彰式は第2学期の被表彰者と共に、平成31年3月に行います。

(学務部学生支援課)

### 平成30年度第1学期被表彰者

29組	丹羽	志萌
30組	新宅	一平
31組	金杉	尚紀
31組	久松	郁美

## 平成30年度小島三司奨学金受給者の決定

この度、平成30年度小島三司奨学金の受給者が決定しました。

本奨学金は、本学の元職員である故小島三司氏の遺志に基づき、アルツハイマー病を研究する大学院生に、奨学金を給付することにより、研究活動の充実を図り、医学の進歩に寄与することを目的として創設された、返還義務のない給付型の奨学金です。

今年度は、2名（医学研究科1名、生命科学学院1名）の推薦があり、厳正な審査を行った結果、推薦のあった2名を本奨学金の受給者として決定しました。受給者には、1年間にわたり月額5万円が給付されます。

(学務部学生支援課)

### 平成30年度受給者

医学研究科	山村	凌大
生命科学学院	白石	昂也

## 平成30年度中島記念国際交流財団助成による 留学生地域交流事業を剣淵町で実施

8月10日（金）・11日（土）の2日間、剣淵町にて、中島記念国際交流財団助成による留学生地域交流事業を開催しました。この事業は、留学生と北海道の地域住民の異文化交流を目的として、学務部学生支援課（旧国際部国際教務課）が開催したもので、4月より本学の山下好孝教授による日本語研修プログラムを学んだ11ヶ国12名の外国人留学生と、5名の新渡戸カレッジ学生が参加しました。

1日目は、旭川市「雪の美術館」でひんやりとした館内で雪や氷の展示を楽しんだ後、雪にまつわる装飾が施された館内を見学し、ホールで生のピアノ演奏を楽しみました。その後、剣淵町役場にて剣淵町長と日本語を使って挨拶や質疑応答をしました。午後からは剣淵町絵本の館にて、4万冊の絵本が収蔵されている館内や原画展を見学しました。その後体験教室で剣淵町の児童ら23名、地域住民によるスタッフら約10名と合流し、絵本の読み聞かせに聞き入ったり、真剣な面持ちで絵本づくりを体験しました。交流の最後には英語のダンスを一緒に踊り、北大生からは、参加のお礼として札幌農学校クッキーを渡しました。その日の夜は、剣淵温泉レークサイド桜岡の多目的ホールにて、新鮮な剣淵の野菜を使った夕食を楽しんだ後、グループでオリエンテーションを兼ねたすごろくゲームで盛り上がり、学生同士の親交を深めました。

2日目の朝、剣淵駅にて7名の剣淵高校生と合流した参加者は、剣淵町の株式会社VIVAマルシェの系列農園、工藤農園で農業体験を行いました。経営者の工藤さんの説明を聞きながら、色や形の異なる50種ものカラフルな採れたてのミニトマトをその場でほおぼって、トマト狩りを楽しみました。午後は昼食会場に移動し、約10名の地域住民スタッフの皆さんと剣淵町特産の多品種の朝採れ野菜でバーベキューを行いました。最初はトマトでおなかがいっぱいと話す参加者も、つやつやと光る生でも食べられる白いとうもろこしには、歓声が上がると一幕もありま

した。参加者は、農家の皆さんが握ったおにぎりに、とうもろこし、ナス、トマト、パプリカ、ニンジン、ピーマン、たまねぎなどの野菜や、焼き鳥などを思い思いに焼いて味わいました。最後は、高校生と留学生がダンスを踊って心をひとつにし、別れを惜しましました。

参加者達は、2日間を通じて地域の児童・高校生・住民らと農業や絵本を通じて交流を楽しみ、日本語や地域文化を学んだほか、学生同士でも交流を深めていました。

（学務部学生支援課）



絵本の館の前で剣淵小児童らと記念撮影



工藤農園でミニトマト狩り



剣淵町の朝採れ野菜のバーベキュー



剣淵高校生、VIVAマルシェのみなさんと

## 2018年新渡戸スクールメンターフォーラムを開催



新渡戸スクールメンター、新渡戸スクール修了生と共に

8月4日（土）、高等教育推進機構にて、新渡戸スクールメンターフォーラムを開催しました。

新渡戸スクールでは、社会の多様な分野で活躍する方々に新渡戸スクールのメンターに就任いただき、スクール生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸スクール生が大学院修了後のキャリアを念頭に、自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じて、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、毎年開催しています。

フォーラムでは、第1部として6名のメンター及び5名の新渡戸スクール修了生を交え、特別講演会を行いました。今年度は「私が考えるグローバルリーダー」及び「プロジェクトマネジメント」をテーマとし、自身のキャリアの紹介及びそれを踏まえたアドバイス等についてお話しいただきました。スクール生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

第2部は、スクール生が各メンターに自由に質問し対話を行う交流会として実施しました。スクール生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスをすることができました。

メンター講演会及び交流会を通して、スクール生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていく

ことができるか等について、貴重な洞察を得ることができました。

今年度のメンターフォーラムは、6名の新渡戸スクールメンターを含む11名の方々の協力を得て実施しました。ご協力いただきました皆様に改めてお礼申し上げます。

（学務部教育推進課）



講演の様子



スクール生との対話の様子



## 高等教育推進機構日本語研修コース修了式(2018年4月入学者)

高等教育推進機構日本語研修コース研修生の修了式を、8月7日(火)に国際連携機構大会議室において行いました。

この日本語研修コースは、大使館推薦の国費外国人留学生に対して大学院進学前の予備教育として開設されている6か月間の研修コースで、今回修了した研修生は、本年4月に入学した12か国からの13名です。10月からは、本学の大学院等で引き続き学ぶことになっています。

修了式では、高等教育推進機構教員や指導教員が見守るなか、長谷川晃高等教育推進機構長から留学生一人ひとりに修了証書が授与されました。

続いて、長谷川高等教育推進機構長より日本語でお祝いの言葉があり、学生は6か月間日本語を学んだ成果を生かして、日本語のスピーチを聞きとろうと真剣に耳を傾けていました。

最後に集合写真を撮影しましたが、その後もしばらく学生たちは、指導教

員やこの半年間で親しくなった学生同士で、お互いに写真撮影をしたり懇談したり、別れを惜しんでいるようでした。

(学務部国際交流課)



修了証書を受け取る学生



集合写真

## 高等教育研修センターにて各研修等を開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、6～8月に以下のとおり各研修等を開催しました。

(高等教育推進機構)

### 講演会「学習評価の基本」 参加者：32名

開催日：6月5日（火）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：学習者の学習を支援、促進するための評価を行うため、教員を対象とし、学習評価に関する基本的知識を獲得することを目的として開催。



講演会「学習評価の基本」

### 講演会「現代の学生理解～学生相談室から見る学生の悩みと成長～」 参加者：60名

開催日：6月13日（水）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：学生の多様化により、学生が抱える悩みも複雑化する中、学生相談室での実践から、職員が個々の学生対応について理解を深めることを目的として開催。



講演会「現代の学生理解～学生相談室から見る学生の悩みと成長～」

### ルーブリック評価ワークショップ

開催日：①作成ワークショップ（入門編）：6月15日（金）

②活用ワークショップ（発展編）：6月20日（水）

参加者：①20名 ②5名

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：評価の観点と基準を定めたルーブリック評価表を活用し、学生に対し明確な評価やフィードバックを行うことを目的として、入門編及び発展編を開催。



ルーブリック評価ワークショップ

### 講演会「メンタルヘルスケアから健全な職場を作る」 参加者：44名

開催日：6月22日（金）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：健全な職場環境を作り、教職員が学生の協力者となるよう、メンタルヘルスにおける予防やケアに役立つポジティブなコミュニケーションスキル、不調のサインと適切なストレス対処方法など、メンタルヘルスの正しい知識やスキルを学ぶことを目的として開催。



講演会「メンタルヘルスケアから健全な職場を作る」

### プレゼンテーション入門 参加者：11名

開催日：7月7日（土）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：プレゼンテーションが苦手な方や基礎を学びたい方を対象に、プレゼンテーションの基本的な知識・技術・心構えを身につけることを目的として開催。



プレゼンテーション入門

### ワークショップ「初めてのシラバス作成」 参加者：10名

開催日：7月28日（土）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：これから授業を担当する予定のある方を対象に、授業設計、デザイン及び作り込み等、シラバスの作成方法を学ぶことを目的として開催。



ワークショップ「初めてのシラバス作成」

### 大学教員準備講座～ Future Faculty Development Program 参加者：17名

開催日：8月6日（月）～8日（水）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：大学院生を対象に、大学教員に必要な、教える能力、論文執筆能力及び発表能力を身につけることを目的として開催。参加者は、ウェスタン大学（カナダ）の講師2名から、学会や国際的認知度のあるジャーナルなどで研究を伝えるときや産学両方の同僚たちとネットワークを作るとき等、将来役立つ実践的な訓練や具体的な戦略を学び、修了者にはウェスタン大学TSC及び北海道大学CTL名の修了証書が授与された。



大学教員準備講座～ Future Faculty Development Program

### ワークショップ①「多様な大学院生と効果的な指導関係を築く」

#### ②「アクティブラーニング：ファシリテーションの技法」

開催日：8月9日（木）

参加者：①9名 ②18名

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：大学教員準備講座に続き、ウェスタン大学（カナダ）のNanda Dimitrov氏及びAisha Haque氏の講師2名によるワークショップを開催。

- ①国際的な研究チームとして、教員と大学院生が文化を越えて協力する必要がある現在、異文化間指導の事例研究に触れ、指導教員が文化を越えて大学院生を指導するための戦略を学ぶことを目的として開催。
- ②授業に学生を引き込むことができる学習活動やツールを学び、アクティブラーニングの方略や教育技術との関わりなど、アクティブラーニングを取り巻く様々な点について検討することを目的として開催。



ワークショップ

「多様な大学院生と効果的な指導関係を築く」  
「アクティブラーニング：ファシリテーションの技法」

### 平成30年度第1回北海道大学TF研修会 参加者：29名

開催日：8月17日（金）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：TF（ティーチング・フェロー）従事予定者を対象に、大学院生が学部教育に参加するにあたって、事前に大学教育の基礎及び教育現場で守らなければならない心得を理解することを目的として開催。なお、本研修は、TFとして採用されるために、修了を義務づけられている研修の1つとなっている。

**事務職員のためのプレゼンテーション入門 参加者：8名**

開催日：8月18日（土）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：プレゼンテーション機会が増えている事務職員を対象に、プレゼンテーションの基本的な知識・技術・心構えを身につけることを目的として開催。



事務職員のためのプレゼンテーション入門

**アクティブラーニング型授業設計ワークショップ 参加者：13名**

開催日：8月20日（月）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：アクティブラーニング型授業を実践している教員を対象に、他の実践者と取組を共有することから、自身の授業の課題や改善点を見つけることを目的として開催。



アクティブラーニング型授業設計ワークショップ

**Teaching in Englishワークショップ（入門編） 参加者：10名**

開催日：8月24日（金）

開催場所：情報教育館3階スタジオ型研修室

開催概要：これから英語で授業を行う予定の方を対象に、多様な受講生が混在するクラスにおける、効果的な授業について学び、検討することを目的として開催。



Teaching in Englishワークショップ(入門編)

## イノベーション・ジャパン2018に出展

8月30日（木）・8月31日（金）の2日間、イノベーション・ジャパン2018（主催：国立研究開発法人科学技術振興機構及び国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構）が東京ビッグサイトにて開催されました。

イノベーション・ジャパンは、大学の研究シーズと産業界の技術ニーズを結びつける国内最大のマッチングイベントであり、今回で15回目の開催とな

ります。500件を超える大学等の研究成果が一同に集結し、大学単位での発表である「大学組織展示」と研究者単位での発表である「大学等シーズ展示（超スマート社会、情報通信、環境保全・浄化、ライフサイエンス、低炭素・エネルギー、医療、マテリアル・リサイクル、装置・デバイス、シニアライフ（高齢社会）、ナノテクノロジー、防災の11分野）」に分かれて展示が行われました。

各ブースとも企業関係者や研究機関関係者らが数多く訪れ、展示内容について熱心に質問し、意見交換を行いました。終日、人の流れは途切れることなく、本学の最先端の研究成果を産業界に広くアピール出来た2日間となりました。

（研究推進部産学連携課）

### ■本学出展のテーマ（下記、7展示）

#### 【大学組織展示】

「見える化による次世代型防災+ロボスト農林水産工学」

代表者：工学研究院・研究院長（教授）・増田隆夫

#### 【大学等シーズ展示】

〔ライフサイエンス分野〕

「海藻の利活用による高付加価値化と持続可能社会の実現」

代表者：水産科学研究院 教授 安井 肇

「観れる・使える・納得できる、顕微鏡施設」

代表者：電子科学研究所 教授 根本知己

「健康社会に貢献する糖鎖科学研究」

代表者：医学研究院 特任准教授 古川潤一

〔マテリアル・リサイクル分野〕

「高耐久性と高分散性を兼ね備えた高輝度希土類発光体」

代表者：工学研究院 特任助教 北川裕一

「熱で瞬時に1000倍硬くなるソフトマテリアル」

代表者：先端生命科学研究院 特任助教 野々山貴行

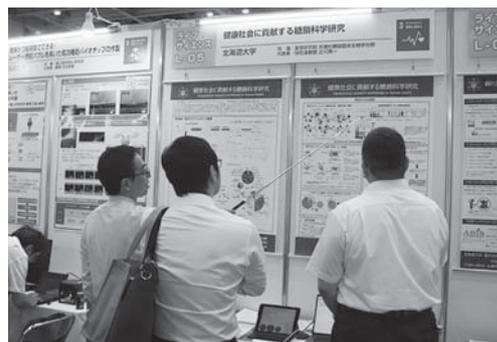
〔装置・デバイス分野〕

「金属酸化物粉末の「同定」と精密品質管理を可能にする電子トラップ密度解析装置」

代表者：触媒科学研究所 教授 大谷文章



大学組織展示の様子



大学等シーズ展示の様子

## 第4回食科学プラットフォームセミナー 「海藻資源の新たな活用」を開催

8月7日（火）、工学研究院フロンティア応用科学研究棟1階セミナー室において、産学・地域協働推進機構が主催する第4回食科学プラットフォームセミナーを開催しました。

今回は「海藻資源の新たな活用」と題して、「海藻」をテーマに水産科学研究院安井 肇教授、産学・地域協働推進機構木曾良信特任教授、水産科学研究院岸村栄毅教授、北海道立工業技術センター研究開発部食産業技術支援グループ木下康宣様、産学・地域協働推進機構城野理佳子産学協働マネージャーの5名の講師に講演いただきました。当日は、研究機関や食品関連企業、行政関係者に加え、一般の方も含めた72名の方にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。

なお、当日の講演については、食科

学プラットフォームwebサイト (<https://www.mcip.hokudai.ac.jp/foodscience/>) に開催報告を公開しておりますので、ぜひご覧ください。

本セミナーは“食（生産、加工、流通）”を重点テーマとして産学官の研究者等、関係者が自由闊達に意見交換できる場を提供しています。安全・安心で高品質な「食」に恵まれた北海道において「農産」「水産」「食品加工」分野のプロジェクト創成を目的とした、産学官のプラットフォームとして機能することを目指し、定期的に開催しています。

産学・地域協働推進機構が事務局の役割を担っており、関係者のご協力を得ながら、今後も皆様の期待に応えられるよう、新たなプロジェクト形成に向けて、具体的な成果の創出を目指し

て参ります。

本研究会に興味のある学内研究者は、お気軽に産学推進本部窓口（[jigy@mcip.hokudai.ac.jp](mailto:jigy@mcip.hokudai.ac.jp)）までお問い合わせください。

（産学・地域協働推進機構）



会場の様子

# 「ウラジオストク航海」に本学学生が参加



出港式における集合写真



留萌港を出港する望星丸

8月7日(火)から15日(水)にかけて、東海大学主催の「ウラジオストク航海」が実施され、本学から学生12名及び引率教員1名(渡部典大工学研究院助教)が参加しました。

この研修は、日本の4大学(東海大学、新潟大学、近畿大学及び本学)の学生が、東海大学の海洋調査研修船「望星丸」で留萌から出港し、ウラジオストクの極東連邦大学を訪問した後、復路において極東連邦大学とサハリン国立大学の学生・教職員も加わり、日露交流を深めるプログラムです。本学が文部科学省の「平成29年度『大学の世界展開力強化事業』-ロシア等との大学間交流形成支援-(タイプB:プラットフォーム構築プログラム)」に新潟大学と共同で採択されたことがきっかけで、ロシアとの交流において長い歴史を持ち、平成29年度の同事業に「ライフケア分野における日露ブリッジ人材育成」が採択された東海大学から、価値ある研修への参加の機会を提供していただきました。

本研修は、海外の大学との学生交流事業としては規模の大きな取り組みで

あり、日露の6大学から、学年も専攻も異なる100名以上の学生と20名近くの教職員が参加することで、広がりのある日露交流の場となりました。また、船上での共同生活・共同作業を通して、相互理解・異文化理解を深めるというのも、特色の一つとして挙げられます。

研修中には、船上講座(日露の教員によるレクチャー、ロシア語講座等)、極東連邦大学における講義やロシア文化体験など、魅力あるプログラムが行われました。主要なプログラムの1つである学生フォーラムにおいては、研修参加前に提示された課題に対する準備をした上で学生達が議論に臨み、異なる価値観・バックグラウンドを持つ者同士が話し合いをすることによる苦労があるにもかかわらず、非常に活発な議論が行われ、大きな成果を得ることができました。

参加した学生からは「本研修は本当に濃密な9日間であり、すばらしい仲間と出会い貴重な経験ができました。」などの声が寄せられています。

今回の研修は、「日露経済協力・人

的交流に資する人材育成プラットフォーム(HaRP)」と銘打った大学の世界展開力事業の取り組みの一つと位置付けており、この研修が、大学間連携による日露交流の推進や学生同士の相互理解や友好親善の促進につながっていくことが期待されます。

10月には、研修参加学生による報告会を予定しておりますので、是非ともご参加ください。

\*本記事には東海大学提供の写真を含んでいます。

(国際部国際連携課)



ウラジオストクで歓迎を受ける東海大学山田学長



学生フォーラムにおける成果発表



船員から説明を受ける学生達



帰港時の集合写真

# 国際連携研究教育局 (GI-CoRE) 量子医理工学グローバルステーションが第1回放射線生物サマースクール及び第5回医学物理サマースクールを開催

国際連携研究教育局 (GI-CoRE) 量子医理工学グローバルステーションは、スタンフォード大学放射線腫瘍学科と合同で、8月1日(水)から6日(月)まで第1回GI-CoRE放射線生物サマースクールを、8月6日(月)から10日(金)まで第5回GI-CoRE医学物理サマースクールを開催しました。今回のサマースクールは本学のHokkaidoサマーインスティテュート(HSI) 2018放射線生物スクール、医学物理スクールと称し、履修可能な科目としても開講しました。

第1回目の開催となる放射線生物サマースクールは台湾、イギリス、ナイジェリア、日本から11名(内3名がHSI科目受講生)が参加しました。医学研究院、獣医学研究院、北海道大学病院、スタンフォード大学、大阪大学、京都大学から講師を迎え、放射線生物学の基礎、応用研究、実験実施方法と理論から実践的な内容までを網羅した講義及び実習を提供しました。参加者からは放射線生物学の専門知識が身につく、貴重で大変役に立つ学び多い内容であったと好評を博しました。

一方、第5回目の開催となる医学物理サマースクールは、中国、アメリカ、マレーシア、フィリピン、シンガポール、インド、ポーランド、ガーナ、パキスタン、イタリア、トルコ、日本から21名(内8名がHSI科目受講生)が参加しました。医学研究院、工学研究院、保健科学院、北海道大学病

院、スタンフォード大学、国立研究開発法人量子化学技術研究開発機構、株式会社日立製作所から講師を迎え、陽子線治療に係る幅広い分野の講義のみならず少人数制による治療計画実習が行われました。

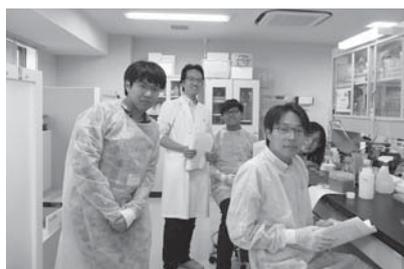
また、同時期に開催された第2回GI-CoRE GSQ, GSB, IGM合同シンポジウムの講演も本サマースクールの講義の一部となっており、本学出身のマサチューセッツ工科大学メディアラボ副所長である石井 裕教授をはじめ、医学研究院、遺伝子病制御研究所、理学研究院、スタンフォード大学、シドニー工科大学からの卓越した講演者による講義が行われ、活発な質疑応答が

交わされました。参加者からはサマースクール全体を通して様々な分野の知識を得ることができ、大変参考になったとの評価を得ました。

8月6日(月)には放射線生物サマースクール及び医学物理サマースクールの参加者合同のレセプションが開催され、参加者・講師間の交流の場及び人脈を広げる場として有意義な会となりました。

今年のサマースクール・HSIの経験を踏まえ来年度も更なる発展を目指します。

(国際連携研究教育局)



ラボでの実習 (放射線生物)



放射線生物サマースクール・HSI講師及び参加者一同



医学物理サマースクール・HSI講師及び参加者一同



治療計画実習 (医学物理)

# 国際連携研究教育局 (GI-CoRE) と遺伝子病制御研究所 (IGM) が合同シンポジウムを開催

国際連携研究教育局 (GI-CoRE) 量子医理工学グローバルステーション (GSQ), 同ビッグデータ・サイバーセキュリティグローバルステーション (GSB) 及び遺伝子病制御研究所 (IGM) は、医学研究院, 情報科学研究科, 工学研究院, 北海道大学病院等の協力を得て, 8月7日 (火)・8日 (水) の2日間, 第2回GI-CoRE GSQ, GSB, IGM合同シンポジウムを開催しました。

GSQにとって第6回目, GSBには第2回目となる本シンポジウムでは, シンポジウム1日目の午前中に北海道150年事業でご来道のマサチューセッツ工科大学メディアラボ副所長である石井 裕教授, 本学理学研究院の前田理教授をお迎えし, スタンフォード大学兼本学GI-CoREのレイ・シン教授を含む3講演者に自身の研究について講演をいただいた後, シドニー工科大学兼本学GI-CoREのプリヤダルシ・ナンダ准教授がパネリストとして, 情報科学研究科兼GI-CoREの宮永喜一教授が司会者として加わり, 情報科学, 理学, 医学に関する研究論や異分野融合研究についてのパネルディスカッションが行われました。午後はIGMの廣瀬哲郎教授, 医学研究院の南保明日香准教授による最先端の医学系研究の発表がありました。

シンポジウム2日目には, グローバルステーションごとに分かれて分科会を実施しました。

GSQ・IGM分科会では, スタンフォード大学兼GI-CoREのクウィンズ・ファン・リー教授, アマート・ジアツシア教授, ダニエル・チャン教授, 医

学研究院兼GI-CoREの清水伸一教授, IGMの藤田恭之教授, 医学研究院の渡部 昌講師による量子, 生物, 医学に関する最先端の研究についての発表がありました。

本シンポジウムは第5回GI-CoRE医学物理サマースクール及びHokkaidoサマーインスティテュート (HSI) 2018医学物理スクールの講義の一部にもなっており, サマースクール・HSI参加者も熱心に講演に聞き入っていました。本分科会には60名以上の参加者があり, 研究者のみならずサマースクール参加者による質疑応答も活発に行われ成功裡に終了しました。

GSB分科会では, シドニー工科大学兼本学GI-CoREのナンダ准教授による, サイバーセキュリティに関する最先端研究の紹介が行われました。この講演は, GSBが主催する, Hokkaido

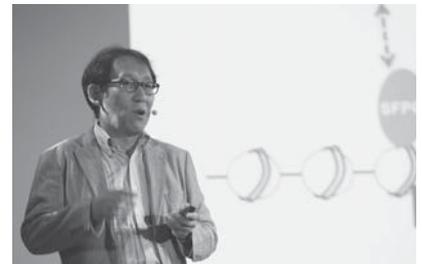
サマーインスティテュート (HSI) 2018の講義 (Cyber Security Fundamentals; Theory and Practices) の一部にもなっています。さらに, その前後において, GSBのRAメンバーによるショートプレゼンが実施されました。RAの研究発表は, 全体で16件あり, ビッグデータ解析の他, IoTシステム, 人工知能, マルチメディア処理など, 広い範囲における異分野連携型の研究開発にかかわる内容で, 参加者による質疑応答も活発に行われ成功裡に終了しました。

2日間に亘って開催された本シンポジウムには分科会も含めて延べ380名以上の参加があり, 第2回目のGI-CoRE合同シンポジウムとしても記念すべきものとなりました。

(国際連携研究教育局)



パネルディスカッション



IGM廣瀬教授



シドニー工科大学ナンダ准教授



GSQ & IGM 分科会

## ■ 部局ニュース

### 「学生相談総合センター」 看板上掲式を挙行



看板を掲げる名和総長ら出席者

学生相談総合センターでは、8月27日(月)に看板上掲式を挙行し、名和豊春総長、長谷川晃理事・副学長、児矢野マリセンター長、河本雅弘学務部長及びセンター関係者が出席しました。

同センターは、8月1日に学内共同施設として、本学における学生相談、修学支援その他の学生支援に関する専

門的業務を一体的に行うことにより、学生の人間形成の促進及び本学全体の教育並びに研究の発展に寄与することを目的として設置されました。

上掲式では、センターの関係職員が見守る中、名和総長及び児矢野センター長により看板が上掲され、センターの門出を祝しました。

なお、同センターは、「学生相談室」

「アクセシビリティ支援室(旧:特別修学支援室)」「留学生相談室」が包括的に統合された施設となりますが、設置場所については、平成31年2月以降に学生交流ステーション(旧建物名称:国際連携機構)2階へ移転予定です。

(学生相談総合センター)

# 学芸員リカレント教育プログラム特論 装飾するギャラリートークと舞台芸術「アートが紡ぐ古代の物語」を開催

8月26日(日)、学芸員リカレント教育プログラム特論2、装飾するギャラリートークと舞台芸術「アートが紡ぐ古代の物語」を、札幌市こどもの劇場やまびこ座で開催しました。本学の学芸員リカレント教育プログラム、通称「学藝リカプロ」は、文化庁から助成を受けている事業で、3年間で企画展制作のスキルを学ぶ、ミュージアム学芸員のためのリカレント教育プログラムです。講義・特論・実習・実践を通して、最終的に、実際の展示制作・運営、及び受講生が勤務するミュージアムで実現できる展示企画案の作成をプログラムの成果とします。今回の講義は公開イベントとして実施し、学藝リカプロの受講生だけでなく、本学の教職員や、関係者も参加しました。

はじめに、関 靖直理事・事務局長の挨拶の後、「OKHOTSK-終わりの楽園-」の上演がはじまりました。5世紀頃、サハリン(樺太)から北海道、オホーツク海沿岸に渡ってきて独自の文化を発展させたオホーツク文化人。「OKHOTSK-終わりの楽園-」は、その遺跡をモチーフとして、プラハ在住の人形劇師沢 則行氏が創作した物語です。『フィギュアアートシアター』と呼ばれる、「人形浄瑠璃三人

遣い」、「砂絵」、「バロック音楽生演奏」、「演劇」などが融合された新しい総合芸術の世界に、114名の観客が引き込まれました。

上演後は、沢氏、アイヌ・先住民研究センター加藤博文教授、そして進行役の創成研究機構岡田真弓特任助教の3名がステージに上がり、沢氏の創作活動に加藤教授がどのように関わったのか、二人のコラボレーションによって生み出されたことなどについて語り合いました。劇中には、加藤教授の学術的な話をもとに沢氏がイメージを膨らませて創作した、回転式離頭銚やオホーツク文化期の土器といった小道具が登場します。一般に展示や書籍など「静的」に表現されることの多い考古学の研究成果が、アーティストの手によってフィギュアアートシアターという「動的」な総合芸術で表現されることにより、時に考古学者の思考を上回る新たな発見があると加藤教授は話します。劇中ではヒロインである女性リーダーが戦いに出るシーンがあり、創作当初は沢氏に対して一部の研究者から、女性が統率者として武器を扱うなど学術的におかしいのではという批判もあったそうです。しかし驚くことに、昨年、加藤教授が発掘調査を進め

ている遺跡から、槍などの狩猟具と共に埋葬されたオホーツク文化期の成人女性の墓が発掘されました。このことから、古代の世界に女性リーダーや、狩を行う女性が存在したことを考える必要性も出てきており、偶然とはいえ、アーティストの創造に考古学的発見が後追いつる形となりました。

アフタートークでは、加藤教授の礼文島での国際フィールドスクールで、沢氏が昨年に行っているワークショップの様子も紹介されました。考古学を志す学生に想像力を養ってほしいと考えている加藤教授は、単に考古学を教えるだけでなく、アーティストである沢氏にクリエイティビティを鍛える授業を依頼しました。

「考古学者の知識や経験のみで、語らない出土物から歴史を読み取るには限界があります。だからこそ、いかに与えられた情報から発想を膨らませ、古代の人々の生活を想像するかが大切です。自らのイメージで仮説を立てられなければ、目の前にある面白い発見も取りこぼしてしまうかもしれない」と加藤教授は話します。沢氏もまた、「想像力がなければ、その学問は緩やかに死んでいってしまうのでは」と話します。



関理事・事務局長の挨拶



沢氏・加藤教授・岡田特任助教によるアフタートーク



沢氏



加藤教授



岡田特任助教



矢吹氏

これは考古学だけでなく、ミュージアムという静的なものを展示する場にも共通するのではないのでしょうか。動かない展示物をどのように想像して動かすか、そういった表現の仕方も学芸員にとって必要なのではないかという加藤教授の言葉で、アフタートークは幕を閉じました。

その後、学藝リカプロの受講生限定で、「人が文化を育て、文化が人を育てる」と題し、札幌市こどもの劇場やまびこ座館長の矢吹英孝氏による講義が行われました。やまびこ座の多岐にわたる活動から、人形劇場のマネジメントや、文化・芸術の発信方法、人材育成などについて学びました。考古学

と人形劇の関わり合いや札幌の人形劇場から学ぶ今回の講義は、受講生の今後の展示企画のヒントになったのではないのでしょうか。

(文学研究科)

## 夏の礼文島で考古学調査の国際フィールドスクールを開催

北海道稚内市から、西方60kmの日本海に位置する最北の離島、礼文島。毎年、夏の礼文島で、アイヌ・先住民研究センター加藤博文教授による国際フィールドスクールが開講されています。加藤教授は、8年前から礼文島北部にある礼文町浜中2遺跡で発掘調査を続けてきました。加藤教授の研究チームにより、縄文文化晩期から近世アイヌ文化期まで、3000年という歳月の中、人々が生活してきた歴史が連続して見つかっています。

加藤教授の国際フィールドスクールに参加するのは、本学の学生や、ロシア・フランス・韓国・台湾など、海外からやって来た学生、研究者達。今年は8月7日(火)から25日(土)までの19日間、3つのグループに分かれ、浜中2遺跡での発掘、出土物の洗浄作業、島内でのインタビュー調査を日替わりで行いました。今とは全く違った環境や文化の中で暮らしてきた人々の歴史を、様々なバックグラウンドを持つ生徒たちが掘り起こす—これもひとつの異文化交流の形であり、自分の生まれ育った場所や国籍などに囚われることなく考古学に触れて欲しいと加藤教授は言います。

そしてもう一つ、加藤教授が昨年からこのフィールドスクールに取り入れているものがあります。プラハ在住の人形劇師、沢 則行氏によるワークショップです。沢氏は、オホーツク文化を題材に人形劇を創作し、その作品には加藤教授の浜中2遺跡での研究成果も取り入れられています。沢氏のワークショップが行われたのは、

フィールドスクールの12日目。朝、生徒たちは浜中2遺跡近くの浜辺で、貝殻やシーグラス、木の枝やプラスチックの欠片など、漂流物を集めました。そして、今は廃校となっている礼文町上泊小学校の体育館で漂流物を使って工作をし、それがどのように使われていたかを想像して物語を作りました。浜中2遺跡から様々なものが発掘されるのは、実は大昔に大きな船が流れ着いたからではないか、昔の人はきっとこんな料理を食べていたに違いない、などそれぞれ自由に歴史を想像して発想を膨らませました。

夜には、影絵の創作をしました。黒い画用紙とセロファンで切絵をつくり、それをOHPでスクリーンに投影します。礼文島で感じたことでも、好きなものでも、作品テーマは自由です。一見、考古学のフィールドスクー

ルと何の関係があるのだろうと不思議に思うかもしれませんが、研究に「想像力」は必要不可欠であり、今ある研究をなぞるだけではイノベーションは生まれません。アーティストの授業を通して、学問的なルールを超えた自由な発想で自分の好きなものを作ってみる、そうした経験が将来の研究の仮説づくりに繋がるのだと加藤教授は話します。

古代より、北南からヒトやモノが往来してきたクロスロードで、今もなお、様々な人々が海を通して繋がり、共に学んでいます。その地で起こった、考古学者と人形劇師という異質のコラボレーション。加藤教授の国籍や学問という枠組みを超えた挑戦は、これからも続きます。

(アイヌ・先住民研究センター)



礼文町浜中2遺跡発掘調査の様子



発掘現場にて出土物について説明する加藤教授



人形劇師の沢氏



影絵ワークショップの様子

# 教育学部でESDキャンパスアジア・パシフィックプログラム2018 (夏季北大プログラム) を開催

教育学部では、2011年から毎年、「社会の持続可能な発展にとって教育のもつ役割は何か?」を主題とした双方向型短期留学支援事業であるESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な発展のための教育) キャンパスアジア・パシフィックプログラムを、韓国・高麗大学校とソウル国立大学校、中国・北京師範大学、タイ・チュラロンコン大学及びロシア・サハリン国立大学の各教育学部と連携して開催しており、今年度はチュラロンコン大学を除く4校が参加し、7月18日(水)から27日(金)の日程で行いました。さらに、本プログラムを北海道大学サマースティテュートとして位置付け、提携校以外の海外の大学からも参加可能とした結果、中国・浙江大学、南開大学、台湾・国立政治大学から各1名ずつの参加者を迎えることができました(北大生13名、海外生19名)。

事前学習として開講した、HUSTEP国際交流科目受講生と合同の「教育学国際講義」は、北海道命名150年にちなみ、「150年前の人々はなぜ札幌を居住地として選んだのか」という問いをめぐって考えるというもので、本学植物園でのフィールドワーク及び北海道のアイヌの現状について講義を受け、受講者なりの答えを導き出しました。さらに本講義は、スーパー・グローバル・ハイスクール指定校である市立札幌開成中等教育学校との高大連携の下で実施された、教育学部生と合同の英語によるコミュニケーション、プレゼンテーション能力の向上を目指した取り組みでもあります。

また本プログラムは派遣先大学ごと

に海外生活のサポートをし合う「バディ・プログラム」を特徴としています。留学生を出迎えることから始まり2日目はオリエンテーション及びキャンパスツアーの後、招へい教員のTyrel Eskelson講師によるESDの基本理念と社会的取り組みの必要性に関する講義“Enlightenment Values in the 21<sup>st</sup> Century: How can we achieve the Sustainable Development Goals by 2030?”, 3日目にはジェフリー・ゲーマン准教授による講義“Thinking through the Sustainability of Indigenous Peoples”が行われました。さらに、6日目には来日した講師4名の基調講演が実施され、本プログラム受講者と科目受講生が共に聴講しました。

このプログラムのもう一つの特色は、「北海道の先住民であるアイヌ民族の文化の理解及び彼らと共存・共生する日高管内平取町の地域振興とアイヌ政策推進について学び考える」という、社会文化的観点から見たESDをテーマとしたフィールドワークの実施です。今年度は、7月21日(土)にミニフィールドワーク(札幌市内)及び7月24日(火)からの1泊2日の日程で平取町フィールドワークを行いました。

平取町フィールドワークでは、ゲーマン准教授による事前講義を受講したうえで、ミニフィールドワークを通じて考案された質問を直接尋ねてみるという形式を取りました。平取町の遠藤桂一副町長、佐藤和三アイヌ施策推進課長、萱野茂二風谷アイヌ資料館の萱野志朗館長、農業を営む貝澤太一氏及び狩猟家の門別徳司氏といった、平取

町においてそれぞれの立場からアイヌ施策に関与する方々から生の声を聞くことができ、受講者からは熱心な質問が相次ぎました。最終日には貝澤氏・門別氏指導のもと、「クチャチセ」(アイヌが山に狩猟に行く際に作る狩小屋)を受講者全員で製作しました。この活動では、北海道の自然の中でアイヌが受け継いできた知恵について学び取りました。

本プログラム8日目午後から、プログラムのまとめとして、受講生が5つのグループに分かれ、「先住民の知恵とSDGs」というテーマで最終報告を行いました。講義やフィールドワークで学んだことが十二分に発揮されただけでなく、自国での現状と照らし合わせ、白熱した議論が交わされました。報告会終了後は、受講生へ修了証書と記念品を授与し、実りある交流が達成できました。

本事業の特徴は双方向型短期留学であり、ESD夏季北大プログラム終了後、北大生は3~4名のグループに分かれて海外大学へ派遣されます。訪れた現地では、各大学のバディと再会し10日間の秋季海外大学プログラムに参加します。さらに、来年2月には市立札幌開成中等教育学校の教諭・生徒及び平取町フィールドワークの各講師を招待して最終報告会を行う予定です。

このように、本プログラムへの参加が契機となり、本学学生と海外大学生が将来的に国家を越えての交流を継続することや、社会の持続可能な発展のために寄与できる「グローバル人材」として成長することが期待されます。

(教育学部)



遠藤平取町副町長及び佐藤アイヌ施策推進課長との対話



クチャチセ作り



ESDプログラム受講者・教員スタッフ

# 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座 「アジアと向き合う－温故知新－」が終了

法学研究科及び附属高等法政教育研究センターでは、7月26日から8月23日までの毎週木曜日（8月16日を除く）、全4回にわたって、公開講座「アジアと向き合う－温故知新－」を開講しました。

本講座は毎年夏に一般市民を対象に開催しているもので、今年で36回目となります。毎年参加される熱心な受講者も多く、法学研究科の夏の恒例行事となっています。今回も定員50名を大きく上回る88名の受講者を得ての開催となりました。

世界の経済、政治においてますますその比重を高めつつあるアジア、とりわけ大国中国と日本社会はどのように向き合うべきなのか。全4回の講座では、日本とアジアの国々との過去における交流とその現代的意義に焦点を当てて、民法学、法史学、法社会学、アジア政治史を専攻する各講師が講演を行いました。

各講師からは、戦後補償、近世における交流と社会の構造変動、近代法文化・法思想の伝播と変容、日中戦争の発生と展開などを題材に、歴史に根差

した多角的な考察が示され、日本とアジアの関係を複眼的に捉える知見を得ることができました。参加者の意欲も高く、毎回活発な質疑が行われました。

最終講義終了後に行われた閉講式では、尾崎一郎高等法政教育研究センター長から所定の回数（3回以上）を受講した77名に修了証書が授与されました。

（法学研究科）

## 「アジアと向き合う－温故知新－」（道民カレッジ連携講座、札幌市教育委員会後援）

第1回 7月26日（木）

『「アジアと向き合う」民法学』 法学研究科教授 吉田邦彦

第2回 8月2日（木）

「近世日本の抜荷とその文芸化にみるアジア観」 法学研究科教授 桑原朝子

第3回 8月9日（木）

「日中の法文化論：法規範の現地化とその論争」 法学研究科講師 郭 薇

第4回 8月23日（木）

「日中戦争」 法学研究科教授 岩谷 将



加藤智章法学研究科長より開講の挨拶(7月26日)



第1回 吉田教授 (7月26日)



第2回 桑原教授 (8月2日)



第3回 郭講師 (8月9日)



第4回 岩谷教授 (8月23日)



尾崎センター長より修了証書の授与(8月23日)

## 法学研究科でサマーセミナー

### 「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催

法学研究科では、8月16日（木）から19日（日）までの4日間、人文・社会科学総合教育研究棟において、サマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催しました。

本セミナーは、日本弁理士会から弁理士の継続研修のための外部研修機関としての認定を受けて、平成21年度から毎年度開催しているものです。その実績が認められ、平成26年度には、文部科学省による「法科大学院公的支援見直し加算プログラム」の審査において、本セミナーは「知的財産法領域における社会的ニーズに即応した『実効的な継続教育プログラム』の実施」であることを理由に「特に優れた取組」とであるとされました。

第10回目となる本年度は、本研究科の田村善之教授、吉田広志教授、外部

招へい講師の清水 節氏（柳田国際法律事務所弁護士）、飯田 圭氏（中村合同特許法律事務所弁護士・弁理士）、および韓 相郁氏（韓国金・張法律事務所弁護士）によって、特許法に関する実務的課題につき、数々の重要裁判例を踏まえて分かりやすく講義されました。受講者は、知的財産事件に携わる実務家（弁理士、弁護士、企業の知的財産部員等）ばかりでなく、大学の教員、大学院学生など幅広い分

野にわたり190名となりました。平成27年度からは、修士課程の授業としても開講されています。受講者は熱心に受講されるとともに、講義の最後の質疑応答では現実に即した様々な質問に対し、各講師は丁寧に答えられています。本年度のサマーセミナーも多くの温かい反響をいただいた中で盛会裡に終了しました。

（法学研究科）



講義を行う田村教授



講義初日の様子

## 法学部同窓会寄附講義「Be ambitious 2018」を開講

8月27日（月）から31日（金）までの5日間、法学部同窓会寄附講義「Be ambitious 2018」が開講されました。

法学部同窓生を中心に、公務員（自治体・国）、銀行員、研究者、法曹（弁護士、裁判官）、民間企業、企業

法務関係者など、様々な職種の15名の講師から、現在の仕事に就ききっかけや仕事のやりがい、日々の業務内容についてご講義いただきました。

単位認定科目としての寄附講義は法学部として初めての企画でしたが、北

大特別学生のonちゃんを含む多くの学生が履修し、好評を得ました。

（法学部）



講義の様子



集合写真



竹谷監事とonちゃん

## 公共政策大学院が「地方公務員向け・地方議員向けサマースクール」を開催 —地方創生について討議—

公共政策大学院（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）では、社会貢献活動の一環として、8月23日（木）・24日（金）に「地方議員・地方公務員向けサマースクール」を開催しました。

「地方議員向けサマースクール」は、地方分権改革が進む中、ますます重要な役割を果たすことになる地方議会の活性化と議員の自己啓発・自己研鑽に資することを目的に、大学院が取り組むものとしては全国初の試みとして、平成20年にスタートし、本年度で11回目の開催となりました。また、一昨年度から地方公務員向けにも同様のサマースクールを開講しています。

本年度は、地方創生に向けた総合戦略の計画期間の4年目に当たることから、折り返し地点を過ぎた自らの自治体の総合戦略を見直し、成果と課題を検証するため、「地方創生を検証する」をテーマとして取り上げ、道外からの参加を含め、「地方公務員向けサ

マースクール」には40名、「地方議員向けサマースクール」には72名の受講者が参加しました。

内容としては、公共政策大学院の石井吉春特任教授から「北海道の人口問題を考える～人口減少にどう向き合い、地方創生を目指すのか～」、下川町の谷一之町長から「豊かな『循環型社会』を目指して『SDGs未来都市2030へのアプローチ』」、東川町の松岡市郎町長から「適疎なまちづくり～東川町における地方創生～」と題して、北海道の将来推計人口とその分析、地域の資源を活用した地方創生に向けた取り組みについてご講演いただきました。

また、グループ討議としては、全国の先進的な取組事例を参考にして、①公共施設管理、②産業振興（農林水産業・観光）、③若年女性の定着・子育て支援の3つのテーマごとに分かれて討議を行いました。具体的には、受講者が関係する自治体について、①自治

体ごとの現状・課題、②現状の取り組み内容、③取り組みを進めるにあたっての課題や留意点、という3つの項目について、熱心な議論が交わされました。討議後は、全体でグループ討議の結果発表と意見交換を行いました。

受講者からのアンケートでもおおむね高い評価を受けており、市町村職員や議員の間で、ともに学び、情報を交換し、議論することができる当スクールのような場が強く求められていることを今回もうかがえました。

今回のサマースクールを一つの契機として、受講者がお互いに親密なネットワークを形成し、今後とも情報交換を重ねながら同志を増やしつつ、それぞれの地域で地域の活性化・振興などに取り組んでいかれることを期待しています。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）



講義風景



全体討議



発表資料の作成

## 薬学研究院で「第12回薬学研究院研究発表会」を開催

8月3日（金）、薬学研究院第一講義室において、「第12回薬学研究院研究発表会」を開催しました。本発表会は、教員のプレゼンテーション能力の向上及び他分野の研究に関する理解を深めることによる共同研究の活性化を目的として、平成24年度に始まり、FD研修会を兼ねて、年2回実施しています。

発表会は、佐藤美洋薬学研究院長による開会挨拶の後、生体分子機能学研究室の古川 敦助教による「自然免疫受容体Mincleの糖脂質認識機構の解明」と題する発表及び、精密合成化学研究室の大西英博准教授による「ローダサイクル中間体を經由する新規環化反応」と題する2件の研究発表が行われました。

本発表会には教員42名が参加し、様々な分野の教員から発表者への質問があり、活発な討論が交わされました。また、参加者へのアンケートを実施することにより、発表に関する感想や改善点等のアドバイスを発表者へフィードバックすることでプレゼンテーション能力の向上に役立てています。教員の異分野への知見の拡大やプ

レゼンテーションの参考に、また、共同研究の活性化に繋がる非常に良い機会であり、大変有意義な会となりました。

次回は平成31年3月に開催予定です。

（薬学研究院）



発表する古川助教



発表する大西准教授

# 薬学研究院で「The 4<sup>th</sup> Japan-Taiwan Joint Symposium for Pharmaceutical Sciences」を開催

8月31日（金）、薬学部臨床薬学講義室において、「The 4<sup>th</sup> Japan-Taiwan Joint Symposium for Pharmaceutical Sciences」を開催しました。本学は2015年に台北医学大学と大学間協定を締結し、薬学研究院では、同年に九州大学を交え、3大学の第1回薬学ジョイントシンポジウムを本学で開催しました。それ以降、台北、福岡と毎年盛会が続き、今年2巡目を迎えました。

今回は、従来の3大学ジョイントシンポジウムをさらに拡充し、より多くの大学間、研究者間の交流を深める場とすべく、さらに日本、台湾の3大学を加えて合計6大学間でのジョイントシンポジウムとして開催しました。日本からは、本学、九州大学の他、東北大学、長崎大学が参加し、台湾からは台北医学大学と国立陽明大学から薬学研究者が参加しました。6大学から臨床系、生物系、化学系、物理系と薬学全領域の先生方を講演者として合計12名招へいし、創薬研究から医療現場までを俯瞰した最新の薬学研究について情報共有し、議論を深めることができました。また、懇親会では佐藤美洋薬学研究院長、台北医学大学のChien-Huang Lin学長からの挨拶の後、笠原正典理事・副学長による祝杯の音頭で

懇談に移り、和やかな雰囲気の中、台北医学大学の交換留学プログラム生2名の修了証の授与を行いました。最後は大戸茂弘九州大学副学長の挨拶があり、盛会のうちに終了しました。

翌日には台北医学大学のChieh-Hsi Wu副学長と佐藤研究院長との発案で両校ラグビー部の交流試合が行われました。台北から30名のラグビー部員が来札し、札幌医科大学新琴似グラウン

ドでラグビーの試合を行い、試合後はサッポロビール園にて台北医学大学の教職員や両校ラグビー部を交えた親睦会を開催しました。教職員のみならず学生レベルでの交流が深まる機会となり、両校の継続的な交流活動が今後ますます発展することが期待できます。

（薬学研究院）



シンポジウム会場の様子



シンポジウム参加者



国立陽明大学康薬学部長と佐藤薬学研究院長



台北医学大学の学生と佐藤薬学研究院長

# 農学院・農学部及び国際食資源学院がシンガポール国立大学との「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」～Agriculture as a domestic culture & industry in a new globalization era～を開催

農学院・農学部及び国際食資源学院では、6月25日（月）から7月24日（火）の日程で、シンガポール国立大学との「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」を開催しました。このプログラムは、今年度が実施初年度であり、平成30年度海外ラーニング・サテライト事業にも採択されています。

「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」は、両大学で開催する約10日間の現地開催プログラムとその準備・予習である数日間のE-learningが1セットになり、計2セットをそれぞれシンガポール国立大学と本学で行うように構成されたシャトルプログラムで、農学院・農学部及び国際食資源学院の学生10名とシンガポール国立大学理学部の学生6名が参加しました。

このプログラムでは、地理、歴史、気候などの環境条件を元に地域に積み重ねられた文化であり産業である農業を再度見つめ直し、文化的背景の異なる国同士が食料生産、加工や流通技術などを学び、農業や食への総合的な理解を相互に深め、グローバル化時代における農業のあり方を考える内容となっています。具体的には①農業、食産業の歴史と文化、②水資源事情と環

境対策、③植物工場とIT農業、④遺伝子組み換え作物、⑤国の経済を支える食産業、⑥食品流通、⑦食産業に関わる人材育成について学び、両国の事情を比較しながら農業や食についての理解を深めました。

シンガポール大学プログラムでは、狭い国土という短所を乗り越えるべく、国外に大規模農園を経営するプランテーションを活用しており、実際に隣国マレーシアの現場へ泊まり込み、実習を行って参りました。また食品の多くを輸入に依存しているため、食の安全に対する先進的な取り組み、人材育成についても学びました。北大プログラムでは、歴史・文化・生産学習として北海道博物館・開拓の村、町村牧場の見学、日本茶体験、札幌キャンパス農場でジャガイモの収穫実習と農業副産物利用としての稲わらからの“わらじ”製造実習、加工・マーケティング学習として中央卸売市場、江別製粉を見学、先進農業学習としてロボットトラクター実演見学、Jファーム苫小牧植物工場見学などを行いました。

午前はディスカッションを交えた教室における座学、午後はフィールドでのアクティブラーニングによって獲得した内容の定着を図り、座学のレポー

トやフィールド見学、実習のレポート等終日講義やフィールド体験学習、さらには繰り返されるレポート提出とハードなスケジュールにも拘わらず、参加した学生はこれらを見事にこなしました。7月24日（火）の最終日には、本学食資源研究棟F205において、両大学の学生を混成した3名1組の5グループが、与えられた農業に関する課題への問題解決方法の提案をフィールド実習で得た経験を生かして発表し、両プログラムに関わった全教員による質疑応答が行われ、全日程を終了しました。両大学の学生はシンガポール、札幌での生活やグループ活動の中で、大いに学び、タイトなスケジュールの中でも学生主体によるジンギスカンパーティの開催やプロ野球日本ハム戦観戦を楽しむなど大いに交流も深めました。

シンガポール国立大学との「Joint Summer Programme in Japan and Singapore」は、今回を第一回目として、今年度を含めて数年間継続する予定であり、10月には今年度の改善点も踏まえ次年度の計画検討会議を東京で開催する計画です。

（農学院・農学部、国際食資源学院）



シンガポール大学プログラムでの集合写真



中央卸売市場での実習風景



北大プログラムでの集合写真



ボランティア団体「SKY」による日本茶体験



農場での実習風景



プレゼン発表会の様子

## 農学院で「留学生オリエンテーション」を開催



京極町ふきだし公園での集合写真

7月27日（金）、農学院留学生オリエンテーションを開催しました。農学院留学生オリエンテーションは留学生主催の新年会とともに約30年以上続いており、今年も10か国・地域からの留

学生27名と教職員4名が参加しました。

午前中は、京極町にある株式会社バイオニアフーズにおいてコロケの製造ラインを見学し、道産野菜を原料と

した調理品の加工について説明を受けました。その後、京極町ふきだし公園で昼食をとり、蘭越町のJAようていトマト集出荷選別施設を訪問しました。この施設では、色によるトマトの選別と箱詰め工程と予冷庫を見学しました。最後に、ニセコ町のJAようてい雪利用米穀貯蔵庫に移動し、約900tの雪が貯蔵された貯雪庫と米の貯蔵庫を見学しながら、雪どけ水を循環させて米を保冷する仕組みについて説明を受けました。

各訪問先では活発な質疑応答が行われ、留学生にとって大変充実した1日となりました。

（農学院）



株式会社バイオニアフーズでの施設見学



JAようていトマト集出荷選別施設の見学



JAようてい雪利用米穀貯蔵庫の見学

# 「第1回東アジアイノベーション促進フォーラム～The 1<sup>st</sup> Korea-China-Japan Joint Symposium 2018: Creating Value Through Interdisciplinary Collaboration for the 4<sup>th</sup> Industrial Revolution～」を開催

8月20日（月）、東義大学校（韓国）において、「第1回東アジアイノベーション促進フォーラム～The 1<sup>st</sup> Korea-China-Japan Joint Symposium 2018: Creating Value Through Interdisciplinary Collaboration for the 4<sup>th</sup> Industrial Revolution～」が開催されました。

これは、昨年、工学研究院で行われた「日中韓工学系合同シンポジウム関係校会議」において、工学研究院が交流を行っている日中韓の関係大学間で合同シンポジウム開催についての賛同があり、本フォーラムの開催に至ったものです。

本フォーラムは、これまでの二者間の交流・連携を発展させ、東アジアの大学が主導する「東アジアによる、東アジアのための東アジア大学ネット

ワーク」を構築するとともに、世界をリードする研究開発及び社会還元を推進し、材料から付加価値の高い最終製品まで一気通貫で行う体制を作り上げる新たなイノベーションを東アジアから発信することを目的として、毎年持ち回りで開催することになりました。

午前の全体会では、はじめにSunjin Kong東義大学校総長、増田隆夫工学研究院長から開会の挨拶があった後、引き続き、岸上順一室蘭工業大学教授、Ge Wang北京科技大学（中国）教授、森谷祐一東北大学教授、山田澤明メディア・コミュニケーション研究院教授、Youngkuk Kim忠南大学校（韓国）教授による基調講演が行われました。

午後には、学生ポスターセッション

の後、分科会が行われ、環境、機械／材料、ICT、産学連携の4分野に分かれて20の発表が行われました。

本フォーラムは、韓国、中国、日本の11大学から94名の教職員及び学生が参加し、活発な意見交換が行われ、盛会のうちに終了しました。フォーラム終了後には、3か国の参加大学の代表者出席のもと、コミッティーミーティングが開かれ、次回開催に向けた協議が行われました。

また、同ミーティング終了後は懇親会が開催され、参加者間の親睦を深めるなど、非常に有意義な時間となりました。次回のフォーラムは、来年、北京科技大学において開催される予定です。

（工学研究院）



開会の挨拶をするKong総長



開会の挨拶をする増田工学研究院長



基調講演をする岸上教授



基調講演をするWang教授



基調講演をする森谷教授



基調講演をする山田教授



基調講演をするKim教授



参加者による集合写真



分科会の様子



ポスターセッションの様子

## 初代忍路丸船名板を水産学部で受贈

7月29日（日）、深沢海洋少年団から、初代忍路丸の船名板を水産学部にご寄贈いただきました。

初代忍路丸は1909（明治42）年に建造され、1927（昭和2）年に、「おしよろ丸」と平仮名に船名を変えたおしよろ丸Ⅱ世の就航までの18年余、本学の練習船として活躍しました。

その後、初代忍路丸は、少年団日本連盟（現ボーイスカウト日本連盟）に譲り渡されましたが、同連盟の流れをくむ深沢海洋少年団の関係者により、初代忍路丸の船名板は大切に保管されてきました。

ご寄贈いただいた船名板については、練習船の歴史や功績を物語る貴重な資料として、総合博物館のご協力の下、今後、水産科学館（函館キャンパ

ス）において大切に保管し、展示などを通じて広く紹介して参ります。

（水産学部）



初代忍路丸船名板



船名板を寄贈される木村水産学部長（左）

## 水産科学研究院でひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ 「これが意外とムズカシイ!海岸動物の社会関係」を開催

8月7日（火）、函館キャンパスにおいて、「これが意外とムズカシイ!海岸動物の社会関係」を開催しました。これは科学研究費助成事業「基盤研究（C）：ヤドカリの配偶者選択：他個体との遭遇履歴を社会情報として利用するか」（研究代表者：和田 哲教授）による成果をもとに、本学の科学研究の一部を体験してもらうプログラムです。

本プログラムは、高校生を対象に募集し、道内外から訪れた9名の高校生を参加者に迎え、水産学部管理研究棟において実施しました。開講式では本プログラムの趣旨説明と科研費に関する説明、次に「ヤドカリの行動生態学」と題した講義を行い、行動生態学の基本的な考え方などを説明しました。

その後、参加者が自ら、ヤドカリの交尾前ガード行動の観察や、オスは他のオスがガードしているメスに興味を示すことを実証する実験を行いました。

た。参加者は大変熱心に観察していました。

講義や実験の途中で挟んだ昼食や休憩時には、当日スタッフとして参加していた水産学部の学生や大学院生及び参加者同士で、和やかな雰囲気の中で交流を図りました。高校生である参加者にとって、大学での研究生活を知る良い機会になったと思います。

予定していた全ての講義・実験を無事に終了し、修了式で修了証書の授与を行った後、閉講となりました。

本プログラムを通して、参加者は、

希少なサンプルや高額な機械がなくても、身近な道具を使って身近な動物を観察することにより、おもしろい現象を発見したり、感じた疑問を自分なりに追求することができるということを学び、「研究」をより身近に感じてもらえたと思います。

最後に、参加者募集から当日のサポートまで尽力してくださった教職員及び学生並びに講師の方々に心より感謝申し上げます。

（水産科学研究院）



ヤドカリの行動観察



クラゲの観察

## 北大農場公開2018

### 「ロボットトラクタ未来農業～ロボットたちが待っている,ちょっと未来を感じよう!～」

8月17日(金), 北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場(北大農場)において, 農場公開を行いました。北大農場では毎年公開を行っており, 年ごとにテーマを決めて施設や教育研究活動を紹介しています。今回は, 現代の農業で近年飛躍的に発展した農業機械について最新のシステムを紹介し体験してもらうプログラムで, 主に札幌市内から小学生と保護者3組7名の参加がありました。当日はオリエンテーションから始まり, ロボットトラクタの説明及び実演, 自動操舵トラクタの体験試乗, 自動枝豆脱莢機の作業見学, 農場生産物の試食を行いました。

はじめに, 山田敏彦農場長から, 農場庁舎屋上から実験圃場で試験栽培されている青々とした作物やのんびりと放牧されている牛を眺めながら, 全国の大学でも都心に農場があることは稀であること等の説明がありました。ロボットトラクタについては, 農学研究岡本博史准教授から, 機械化農業により一人当たりの耕作面積は拡大し生産性が高まったが近年は農家の後継者不足や高齢化など農家人口が減少し食料の安定供給が危ぶまれていること, 未来の農業に向けて最新の「ICTを活用したスマート農業」(農業のロボット化)で様々な上記の問題を解消するための取り組みを進めていることの説明がありました。

続いて, 無人トラクタを倉庫前から作業を行う畑まで走行させる実演をし, 走行時に説明者がトラクタ前方に

近づくと障害物を感知し緊急停止(ブザーが鳴りトラクタ上部のパトライト赤ランプが点灯)する様子や, 狭い農道を逸れることなくプログラム通りに移動する正確性などを, 走行している無人トラクタの後を歩きながら見学しました。

生憎の雨により, 当初予定していた畑での無人トラクタの除草作業はできませんでしたが, その後, 自動走行するトラクタへの乗車体験を実施しました。普段乗り慣れている車とは違う高い座席からの広い視野や, 力強いトラクタのエンジン音や振動を体験してもらうことができました。自動枝豆脱莢機の見学では, 枝ごと刈り取ってきた枝豆から自動で莢をもぎ取る作業を実

演し, 次々と枝から自動で莢が外されていく様子に大人も子供も歓声を上げ, 楽しんでいただけたようでした。

最後に, 北大農場で作られているアイスクリームを試食してもらい, 全ての予定を終了しました。

前日からの雨天で畑での実演を行えず, また, 足元が悪い中での見学となりましたが, 参加した小学生や保護者の方は, 熱心に話を聞き多くの質問をするなど強く関心を持たれたようです。今後も農場公開を通して「農業における機械の役割や重要性」について考える機会を提供していきます。

(北方生物圏フィールド科学センター)



屋上でのオリエンテーション



無人走行の見学



無人トラクタの試乗



自動枝豆脱莢機のデモ作業

# 電子科学研究所で物質・デバイス領域共同研究拠点活動報告会及びダイナミック・アライアンス成果報告会を開催



参加者集合写真

6月28日(木)・29日(金)、本学電子科学研究所、東北大学多元物質科学研究所、東京工業大学化学生命科学研究所、大阪大学産業科学研究所、九州大学先導物質化学研究所が形成する全国規模のネットワーク型共同研究拠点「物質・デバイス領域共同研究拠点」の第8回活動報告会及び同拠点の研究活動プロジェクトである「人・環境と物質をつなぐダイナミック・アライアンス」の平成29年度成果報告会を、当番校となった本学のフロンティア応用科学研究棟(鈴木章ホール)で開催しました。

28日(木)は、中垣俊之電子科学研究所長による共同利用・共同研究拠点活動の中でも先進的な取組みである本ネットワーク拠点の成果をご覧いただきたいとの開会挨拶に始まり、来賓の文部科学省研究振興局学術機関課の西井知紀課長から、本拠点のさらなる活動強化に期待を込めたいとの挨拶をいただいた後、当番校を代表して西井準治理事・副学長から、本拠点について本学を挙げて支持したいとの挨拶がありました。

その後、拠点本部長である東北大学の村松淳司多元物質科学研究所長及びアライアンス事業本部長である大阪大

学の菅沼克昭産業科学研究所長による各事業活動概要報告があり、続いて、台湾国立交通大学のLi教授による台湾国立交通大学と本拠点との国際連携に関する特別講演及び、電子科学研究所のBiju教授による講演等、国内外の研究者による多くの講演が行われました。

29日(金)は、平成28年度に認定されたネットワーク型共同研究拠点「生体医歯工学共同研究拠点」の拠点本部

長である東京医科歯科大学の宮原裕二生体材料工学研究所長から同拠点の活動概要と本拠点との連携に関する特別講演等、前日に引き続き多くの講演が行われ、最後に外部有識者から、研究成果を実社会でより役立つよう検討する事が今後重要との講評をいただき、盛況のうちに2日間の日程を終了しました。

本報告会は、初日215名、2日目185名の参加があり、講演の合間に行われたポスターセッション(両日とも掲示)や初日終了後の意見交換会(134名参加)においても、活発な情報交換が行われた他、ウェブ中継には約100件のアクセスがあり全国から多くの研究者等が参加する充実したひとときとなりました。

(電子科学研究所)



中垣所長による開会挨拶



西井学術機関課長による来賓挨拶



西井理事・副学長による当番校挨拶



Li教授による特別講演

## 第5回北極域オープンセミナーを開催

7月20日（金）、連携ネットワーク型の共同利用・共同研究拠点である北極域研究共同推進拠点（\*1）主催による第5回北極域オープンセミナーが、フード&メディカルイノベーション国際拠点ホールにて開催されました（\*2）。

本セミナーでは、温暖化による海水減少などの環境変化を背景に、社会的・経済的变化に直面している北極域の環境変動を捉え、北極域をめぐる天然ガス・石油などのエネルギーをはじめとする資源開発、海運ネットワーク、農林水産業、観光及び通信などの分野における北極域の持続的利用に向け、企業や官公庁の関係者に北極域の最新情報を提供すると共に、共同研究等への新規参入の需要を喚起することを目的としています。

今回は、「最新の北極域研究と産業・社会への応用の可能性に向けて」を主題とし、演題として「AMAP（\*3）報告書から見る北極域研究」、「北極域から日本への気候影響とその

予測」、「気候変動がサケの生活史とバイオマス動態に及ぼす影響」、「北極域航路の新たな活用モデル」、「北極域観光・クルーズの現状と展望と北海道」及び「北極海光海底ケーブルの実現可能性とその波及効果」について、北極域に係る科学・技術の進展や新たな研究による最新の情報を提供し、社会実装、事業創出への可能性を議論することを主旨としました。

本セミナーには、産業界や官公庁を中心に70名と多くの方々が参加し、活発な質疑応答・交流がなされ盛会裡に終了しました。



東京大学大気海洋研究所羽角博康教授「北極域から日本への気候影響とその予測」

（\*1）構成三施設  
国立大学法人北海道大学北極域研究センター（中核施設）  
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立極地研究所国際北極環境研究センター（連携施設）  
国立研究開発法人海洋研究開発機構北極環境変動総合研究センター（連携施設）

（\*2）<http://j-arcnet.arc.hokudai.ac.jp/news/21610/>

（\*3）北極評議会北極圏監視評価プログラム作業部会

（北極域研究センター）



北海道大学嶋山雅秀名誉教授「気候変動がサケの生活史とバイオマス動態に及ぼす影響」

## 東海林力蔵関係資料を大学文書館で受贈

8月16日（木）、札幌農学校第19期生東海林力蔵のご息女福原 康氏がご令孫福原克郎氏と共に大学文書館に来館され、東海林力蔵に関する資料をご寄贈くださいました。

東海林力蔵（1878～1924年）は、小樽に生まれ、1892（明治25）年に札幌農学校予科に入学、1897年に本科に進学します。本科の同級である第19期生には有島武郎（文筆家）、半澤洵（応用菌学者）、星野勇三（園芸学者）、森本厚吉（新渡戸文化学園創立者）らがいました。東海林は農学校では農学甲科のゼミナールに所属し、作物学を専攻しました。1901年に卒業論文「小豆種子発芽作用ニ関スル研究」を提出し卒業、その後も研究生、講師、助教授

として農学校に残ります。1913～1915年にイギリス・ドイツ・アメリカに留学し、1918（大正7）年に北海道帝国大学教授に就任、翌年には農学博士の学位も取得します。1923年、新設の岐阜高等農林学校に初代校長として転出しますが、翌1924年11月6日に46歳の若さで逝去しました。

今回、ご寄贈いただいた資料は、書簡（封書、絵葉書）、写真、海外留学関係の書類、甲辞文など文箱1箱です。1910～1920年代の大学構内の風景や、国内外での同窓生のネットワークを示す、たいへん貴重な資料です。大学文書館において歴史的資料として利用できるよう、整理、保存をして参ります。

また、当日は、東海林力蔵が学生・教員として札幌農学校・北大に在籍した時代の資料を、大学文書館1階の会議室においてご覧いただきました。札幌農学校入学・在学に関する文書、夏季修学旅行報告、在学・在職期の写真、留学中に知人に宛てた葉書、教授時代の担当学科目などです。

今後も大学文書館では、東海林力蔵のように大学を支えた人物について、受贈いただいた資料等を活用し展示や閲覧利用等を通じて紹介して参りたいと思います。

（大学文書館）



札幌農学校第19期生（1901年頃）  
左から、渡部甚作、東海林力蔵、半澤洵



大学構内風景の絵葉書（1914年）  
左から、農芸化学教室、図書館



資料見学風景

## ■お知らせ

# 総合博物館へのご寄附について

総合博物館は、1999年の開館以来、札幌農学校の時代から継承されてきた貴重な学術標本の整理・保管や、教育・研究成果の公開・発信に努めています。さらに、近年は学生を対象とした博物館教育プログラムの実施や市民を対象としたセミナーの開催など、精力的な活動を展開しています。

この度、より一層の活動強化と展示等の充実、施設・設備の整備を目的として、広くご寄附を募るべく新たにリーフレットを作成しました。多くの方々からの温かいご支援・ご協力をお待ちしています。

### 1. 寄附の単位

一口1万円

※口数は定めていません。また、法人・個人の別はありません。

### 2. 寄附金の用途

- (1) 常設展示の充実
- (2) 市民講演の実施
- (3) 休憩スペースの整備
- (4) 展示用標本の収集

### 3. 寄附へのお礼

- (1) ご寄附いただいた皆様のお名前を記した冊子「寄附者芳名録」を総合博物館正面玄関に設置します。また、総合博物館ホームページにも感謝の言葉とともに、皆様のお名前を記します。
- (2) 総合博物館の外壁タイルを用いて作成した「メモリアル・タイル」をお贈りします。
- (3) 5口以上ご寄附いただいた皆様へは、総合博物館正面玄関付近にパネルを設置し、感謝の言葉とともにお名前を記します。
- (4) 20口以上ご寄附いただいた方のお名前は、葉の形を模したプレートに記します。  
※パネル・プレートは、2026年3月末日まで掲示します。

### 4. 税法上の優遇措置について

- (1) 個人による寄附の場合、寄附金が2,000円を超える場合、超えた金額が当該年の所得から控除されます。  
※ただし、寄附金の額が総所得金額等の40%を上回る場合は40%が限度となります。  
※「北海道大学総合博物館」へのご寄附は、所得税法上の寄附金控除の対象となる特定寄附金（所得税法第78条第2項第2号）として財務大臣から指定されています。減免措置を受ける手続きは、本学が発行する「寄附金（北大フロンティア基金）領収書」を添えて、所轄税務署に確定申告をしてください。
- (2) 法人による寄附の場合、全額損金算入をすることができます。  
※「北海道大学総合博物館」へのご寄附は、法人税法上の全額損金算入を認められる寄附金（法人税法第37条第3項第2号）として財務大臣から指定されています。

### 5. お申し込み方法

以下のいずれかの方法により、お申し込みください。

- (1) 下記宛てに、メール、FAXまたは郵便で「住所」「氏名」「電話番号」「個人・法人の別」をご連絡ください。後日、案内書を郵送します。

[総合博物館事務室]

TEL : 011-706-3607 FAX : 011-706-4029

メール : museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

郵便 : 〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西8丁目



# レクリエーション

## 平成30年度学内バレーボール大会の開催

職員レクリエーションの一環として例年実施しているバレーボール大会を7月27日（金）から8月8日（水）まで、第2体育館で開催しました。

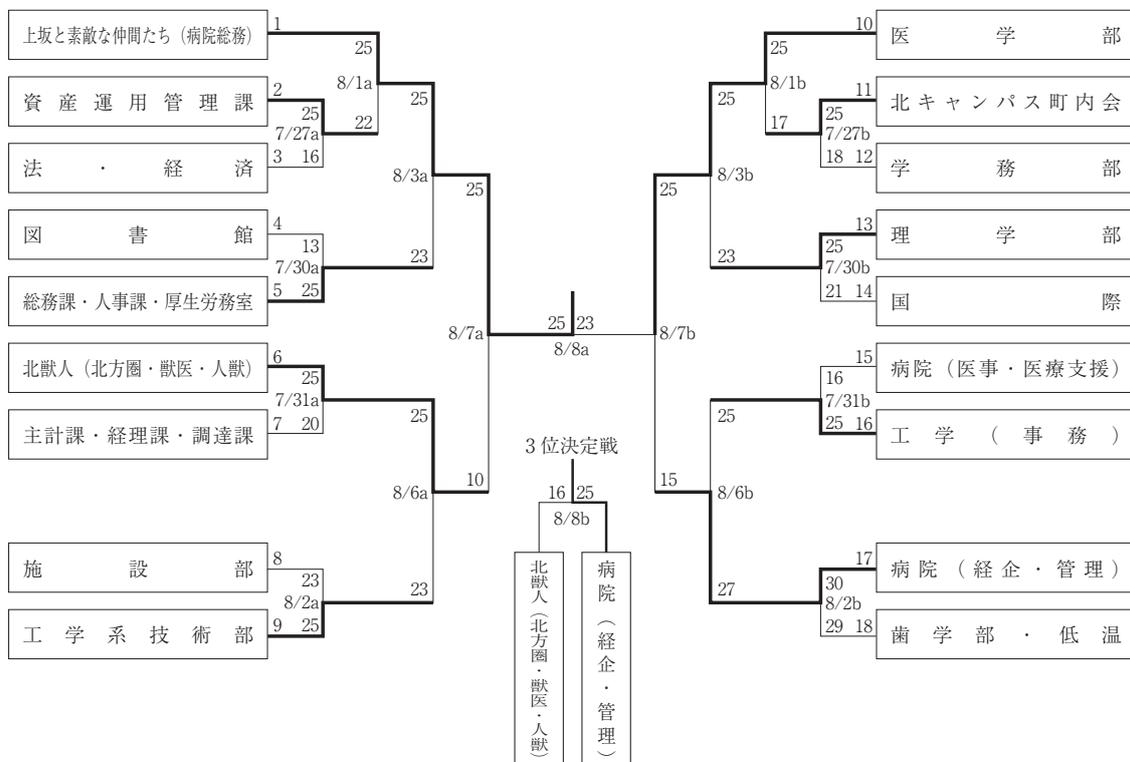
今年度も多くの教職員が参加し、活気あふれる大会となりました。

結果は以下のとおり、病院総務チームが大会2連覇を達成しました。おめでとうございます。

なお、北大職員バレー部では、学校開放を利用した練習（月2回程度）を行っています。バレー部の活動に興味がある方は、お気軽に連絡ください。

（職員排球部）

平成30年度学内バレーボール大会組合せ表



優勝 上坂と素敵な仲間たち (病院総務)



準優勝 医学部



第3位 病院 (経営企画課・管理課)

# 教職員テニス大会の開催

職員硬式庭球同好会主催により、各種テニス大会を開催しました。結果は以下のとおりです。

(職員硬式庭球同好会)

## ○シングルス大会

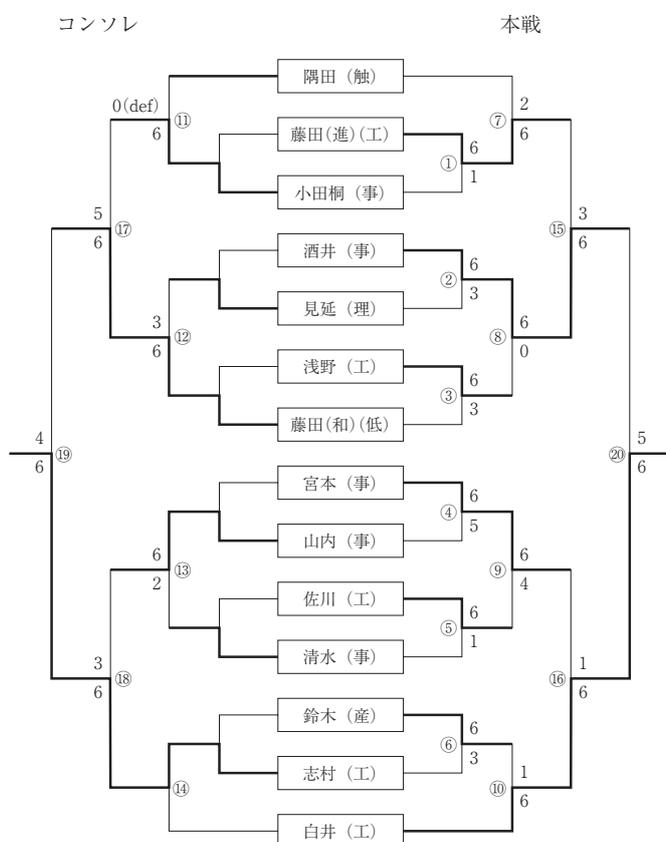
開催日：7月7日(土)

場 所：工学部・農学部・低温科学研究所の各コート

参加者：32名

## 平成30年度学内シングルス大会結果

**【男子A級】** 会場：工学部コート



本戦	優勝	白井(工)
	準優勝	酒井(事)
	3位	藤田(進)(工)

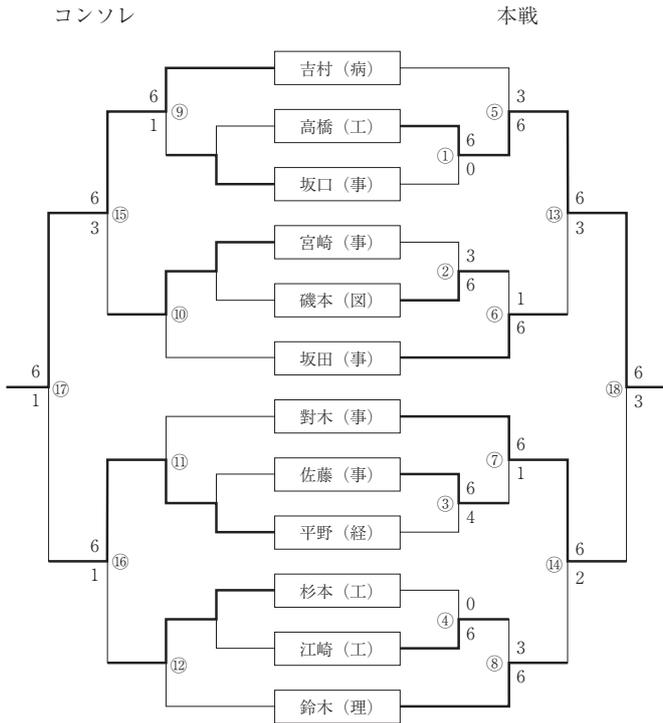
コンソレ	優勝	志村(工)
	準優勝	藤田(和)(低)
	3位	小田桐(事), 山内(事)

3位決定戦	藤田(進)(工)	宮本(事)
	6	0



男子A級優勝

【男子B級】 会場：低温研コート



本戦	優勝	高橋 (工)
	準優勝	対木 (事)
	3位	坂田 (事)

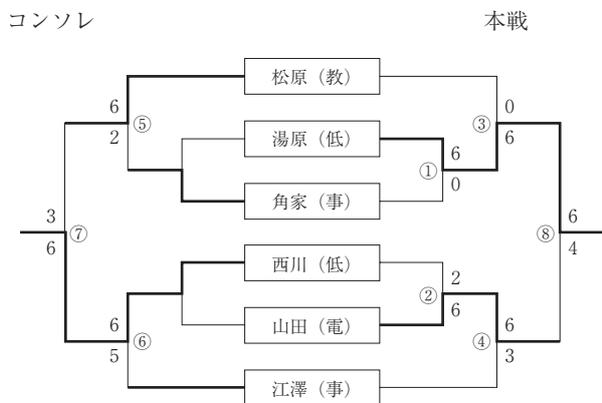
コンソレ	優勝	吉村 (病)
	準優勝	平野 (経)

3位決定戦	坂田 (事)	鈴木 (理)
	6	2



男子B級：準優勝，優勝，3位

【女子BC級】 会場：農学部ハードコート



本戦	優勝	湯原 (低)
	準優勝	山田 (電)

コンソレ	優勝	西川 (低)
	準優勝	松原 (教)



女子BC級：コンソレ優勝，準優勝，優勝，コンソレ準優勝

## ○ダブルス大会

開催日：8月4日（土）

場所：工学部・農学部・低温科学研究所の各コート

参加者：54名

## 平成30年度学内ダブルス大会結果

【男子A級】会場：学務部コート（オムニ3面）

## 予選リーグ

## Aブロック

氏名	浅野 白井	藤田(和) 對木	酒井 佐川	勝：負 (ゲーム数)	順位
浅野 泰寛 (工) 白井 和貴 (工)	/	6-2 ○	7-6 ○	2-0	1
藤田 和之 (低) 對木 文宏 (事)	2-6 ×	/	2-6 ×	0-2	3
酒井 広 (事) 佐川 浩太 (工)	6-7 ×	6-2 ○	/	1-1	2

## Bブロック

氏名	藤田(進) 下山	山内 宮本	清水 中屋敷	勝：負 (ゲーム数)	順位
藤田 進一郎 (工) 下山 宏 (低)	/	6-2 ○	6-3 ○	2-0	1
山内 隆嗣 (工) 宮本 大悠斗 (事)	2-6 ×	/	6-2 ○	1-1	2
清水 泰貴 (事) 中屋敷 洋介 (事)	3-6 ×	2-6 ×	/	0-2	3

## Cブロック

氏名	志村 山内	安達 沖田	宮崎 高橋	勝：負 (ゲーム数)	順位
志村 和紀 (工) 山内 貴敏 (事)	/	1-6 ×	6-1 ○	1-1	2
安達 孝徳 (経) 沖田 正彦 (事)	6-1 ○	/	6-2 ○	2-0	1
宮崎 脩平 (事) 高橋 英嗣 (工)	1-6 ×	2-6 ×	/	0-2	3

## 決勝リーグ

## 1位ブロック

氏名	安達 沖田	藤田(進) 下山	浅野 白井	勝：負 (ゲーム数)	順位
安達 孝徳 (経) 沖田 正彦 (事)	/	7-6 ○	6-3 ○	2-0	1
藤田 進一郎 (工) 下山 宏 (低)	6-7 ×	/	6-3 ○	1-1	2
浅野 泰寛 (工) 白井 和貴 (工)	3-6 ×	3-6 ×	/	0-2	3

## 2位ブロック

氏名	志村 山内	山内 宮本	酒井 佐川	勝：負 (ゲーム数)	順位
志村 和紀 (工) 山内 貴敏 (事)	/	6-3 ○	3-6 ×	1-1	2
山内 隆嗣 (工) 宮本 大悠斗 (事)	3-6 ×	/	0-6 ×	0-2	3
酒井 広 (事) 佐川 浩太 (工)	6-3 ○	6-0 ○	/	2-0	1

## 3位ブロック

氏名	清水 中屋敷	宮崎 高橋	藤田(和) 對木	勝：負 (ゲーム数)	順位
清水 泰貴 (事) 中屋敷 洋介 (事)	/	6-1 ○	6-2 ○	2-0	1
宮崎 脩平 (事) 高橋 英嗣 (工)	1-6 ×	/	1-6 ×	0-2	3
藤田 和之 (低) 對木 文宏 (事)	2-6 ×	6-1 ○	/	1-1	2



男子A級優勝

【男子B級】 会場：農学部コート（ハード2面）

氏名	是安 中原	江崎 田附	鈴木 平野	坂田 佐藤	勝：負 (ゲーム数)	順位
是安 晴樹(事) 中原 寛基(事)		6-2 6-0 ○	6-2 6-3 ○	5-7 3-6 ×	2-1	2
江崎 公二(工) 田附 望(工)	2-6 0-6 ×		3-6 1-6 ×	0-6 6-7(8-10) ×	0-3	4
鈴木 敦生(理) 平野 亮(経)	2-6 3-6 ×	6-3 6-1 ○		2-6 3-6 ×	1-2	3
坂田 諒(事) 佐藤 辰紀(事)	7-5 6-3 ○	6-0 7-6(8-10) ○	6-2 6-3 ○		3-0	1



男子B級参加者

【女子A級】 会場：工学部コート（クレ-2面）

予選リーグ

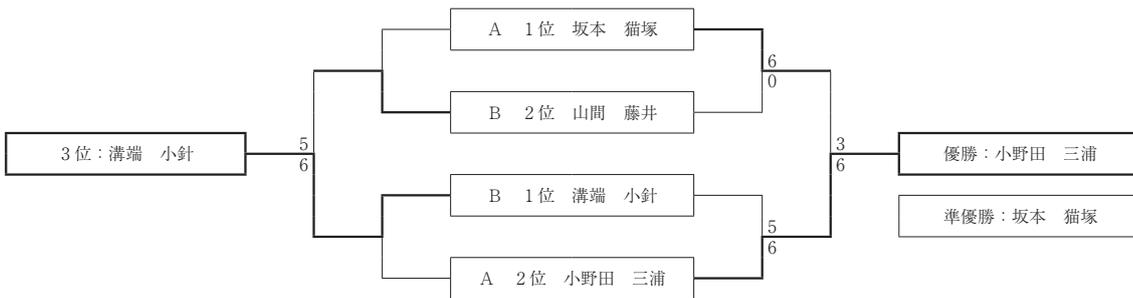
Aブロック

氏名	坂本 猫塚	西川 ヤーネル	古谷 柏原	小野田 三浦	勝：負 (ゲーム数)	順位
坂本 ゆう子(図) 猫塚 和美(事)		6-1 ○	6-0 ○	6-1 ○	3-0	1
西川 はつみ(低) ヤーネル 由起子(低)	1-6 ×		6-4 ○	0-6 ×	1-2	3
古谷 久美子(図) 柏原 麻美(文)	0-6 ×	4-6 ×		0-6 ×	0-3	4
小野田 実由紀(高) 三浦 千穂(図)	1-6 ×	6-0 ○	6-0 ○		2-1	2

Bブロック

氏名	山田 湯原	山間 藤井	溝端 小針	勝：負 (ゲーム数)	順位
山田 美和(電) 湯原 綾子(低)		2-6 ×	2-6 ×	0-2	3
山間 久美子(薬) 藤井 恵美子(工)	6-2 ○		5-6 ×	1-1	2
溝端 小百合(事) 小針 布美子(理)	6-2 ○	6-5 ○		2-0	1

決勝トーナメント



下位リーグ

氏名	西川 ヤーネル	山間 湯原	古谷 柏原	勝：負 (ゲーム数)	順位
A 3位 西川 ヤーネル		6-4 ○	6-4 ○	2-0	1
B 3位 山田 湯原	4-6 ×		6-2 ○	1-1	2
A 4位 古谷 柏原	4-6 ×	2-6 ×		0-2	3



女子A級優勝

## 【女子C級】会場：工学部コート（クレ－1面，オムニ1面）

## 予選リーグ

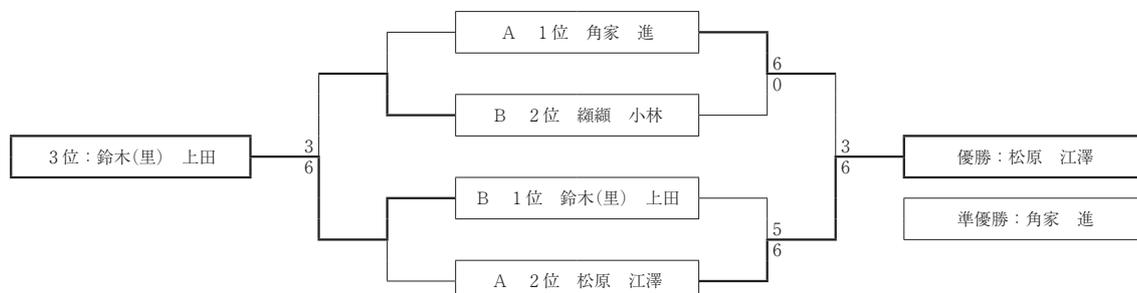
## Aブロック

氏名	阿部 藤田	松原 江澤	板倉 小野寺	角家 進	勝：負 (ゲーム数)	順位
阿部 ひかり (工) 藤田 真由 (工)	/	0 - 6 ×	6 - 2 ○	0 - 6 ×	1 - 2	3
松原 友姫 (教) 江澤 海 (事)	6 - 0 ○	/	6 - 0 ○	4 - 6 ×	2 - 1	2
板倉 恭子 (工) 小野寺 佑佳 (工)	2 - 6 ×	0 - 6 ×	/	1 - 6 ×	0 - 3	4
角家 由起子 (事) 進 万里奈 (病)	6 - 0 ○	6 - 4 ○	6 - 1 ○	/	3 - 0	1

## Bブロック

氏名	西郷 鈴木(あ)	瀬瀬 小林	鈴木(里) 上田	勝：負 (ゲーム数)	順位
西郷 裕子 (工) 鈴木 あずみ (工)	/	0 - 6 ×	0 - 6 ×	0 - 2	3
瀬瀬 ゆかり (工) 小林 まどか (メ)	6 - 0 ○	/	0 - 6 ×	1 - 1	2
鈴木 里奈 (事) 上田 しのぶ (事)	6 - 0 ○	6 - 0 ○	/	2 - 0	1

## 決勝トーナメント



## 下位リーグ

氏名	阿部 藤田	西郷 鈴木(あ)	板倉 小野寺	勝：負 (ゲーム数)	順位
A 3位 阿部 藤田	/	4 - 2 ○	3 - 6 ×	1 - 1	2
B 3位 西郷 鈴木(あ)	2 - 4 ×	/	3 - 5 ×	0 - 2	3
A 4位 板倉 小野寺	6 - 3 ○	5 - 3 ○	/	2 - 0	1



女子C級優勝

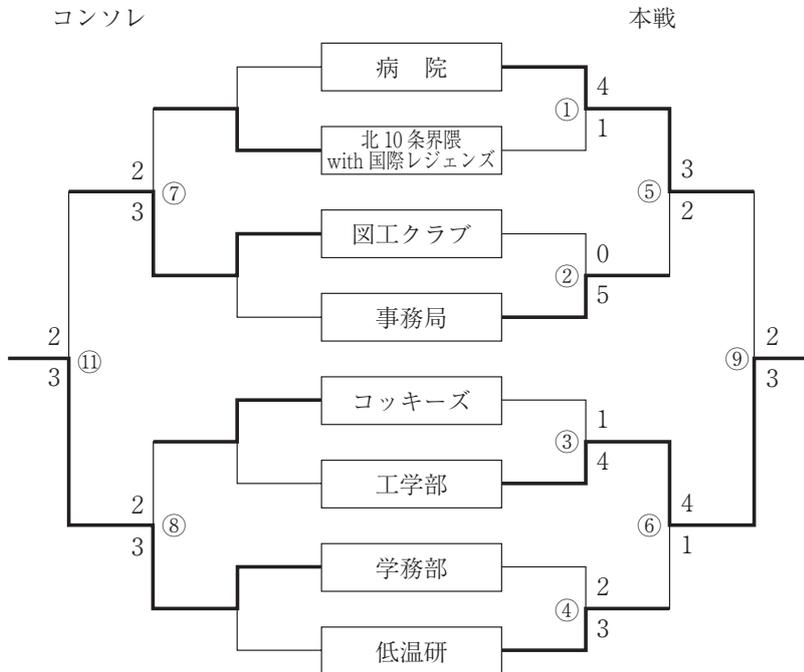
○部局対抗戦

開催日：9月1日（土）

場 所：工学部・学務部・低温科学研究所の各コート

参加者：74名

平成30年度学内部局対抗戦結果

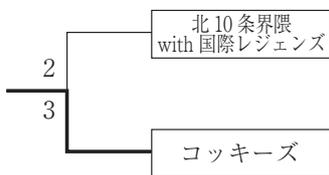


優勝：工学部チーム

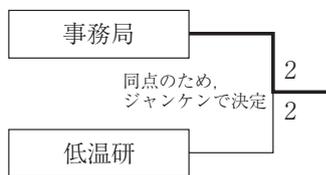


準優勝：病院チーム

コンソレ 3位決定戦⑫



3位決定戦⑩



3位：事務局チーム

コンソレ	優勝	学務部
	準優勝	図工クラブ
	3位	コッキーズ

本戦	優勝	工学部
	準優勝	病院
	3位	事務局



コンソレ優勝：学務部チーム

## ■ 学内規程

### 北海道大学遺伝子病制御研究所規程の一部を改正する規程

(平成30年9月1日海大達第128号)

平成30年9月1日付で、遺伝子病制御研究所の疾患制御研究部門にがん制御学分野を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

## ■ 研修

### 研修名：平成30年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修

開催期間：平成30年8月21日～23日

開催場所：工学部フロンティア応用科学研究棟

研修目的：北海道地区国立大学法人等の中堅技術職員として、現在の立場と責務を自覚させるとともに、職務遂行に必要な知識や社会的識見等を深め、国立大学法人等の技術系業務における中核となるべき職員として、その資質向上を図ることを目的とする。



開講式挨拶  
(松藤敏彦技術支援本部副本部長(工学研究院教授))



講義「ハラスメントの防止のために」  
(李 明憲ハラスメント相談室専門相談員)



講義「情報セキュリティ」  
(飯田勝吉情報基盤センター准教授)



講義・グループワーク

(技術支援本部)

## ■表敬訪問

### 海外

年月日	来訪者	来訪目的
30.8.31	台北医学大学 Chien-Huang Lin学長	両国の交流に関する懇談



台北医学大学 Chien-Huang Lin学長  
(前列中央左)

(国際部国際連携課)

## ■人事

平成30年9月1日付発令

新職名(発令事項)	氏名	旧職名(現職名)
【役員】 (免・財務部長)	関 靖 直	理事(事務局長)(兼)財務部長
【教授】 大学院工学研究院教授 遺伝子病制御研究所教授	木 村 克 輝 園 下 将 大	大学院工学研究院准教授 採用
【部長】 財務部長	西 田 眞 吾	長崎大学財務部長

新任教授紹介

平成30年9月1日付



大学院工学研究院教授に

木村 克輝 氏

環境創生工学部門  
水代謝システム分野

生年月日

昭和44年11月20日

最終学歴

北海道大学大学院工学研究科博士課程退学(平成9年3月)  
博士(工学)(北海道大学)

専門分野

環境工学, 水処理工学



遺伝子病制御研究所教授に

園下 将大 氏

疾患制御研究部門  
がん制御学分野

生年月日

昭和51年8月5日

最終学歴

京都大学大学院医学研究科博士課程修了(平成16年3月)  
博士(医学)(京都大学)

専門分野

実験腫瘍学

新任部課長等紹介

平成30年9月1日付



財務部長に

西田 眞吾 氏

昭和38年8月生

昭和57年4月 大分工業高等専門学校

昭和60年4月 大分大学

昭和63年4月 文部省大臣官房文教施設部指導課監理室

平成3年4月 文部省大臣官房文教施設部指導課

平成6年4月 文部省大臣官房会計課管財班

平成7年1月 文部省大臣官房会計課管財班管財第一係主任

平成7年4月 文部省大臣官房会計課管財班管財第二係主任

平成8年4月 埼玉大学政策科学教育研究機関(仮称)創設準備室主幹付専門職員

平成9年10月 政策研究大学院大学会計課会計係長

平成10年4月 政策研究大学院大学会計課総務係長

平成11年4月 文部省大臣官房会計課用度班施設係長

平成13年1月 文部省大臣官房会計課用度班物品係長

平成13年4月 文部科学省大臣官房会計課用度班総括係長

平成13年7月 弘前大学主計課長

平成15年10月 政策研究大学院大学会計課長

平成16年4月 政策研究大学院大学財務マネジメント課長

平成18年4月 文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課補佐

平成21年4月 文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付参事官補佐

平成24年4月 文部科学省大臣官房会計課用度班主査

平成25年4月 岐阜大学財務部長

平成28年4月 長崎大学財務部長

## 訃報

### 名誉教授 <sup>みに</sup>三谷 <sup>てつお</sup>鉄夫 氏 (享年84歳)

名誉教授 三谷鉄夫先生は病氣療養中のところ、平成30年8月12日に逝去されました。

三谷鉄夫名誉教授は昭和9年名寄市に生まれ、弘前大学を経て昭和31年に北海道大学文学部哲学科（社会学専攻）を卒業、池田高等学校教諭、北海道立教育研究所所員を経て、昭和35年に北海道大学文学部助手に採用されました。昭和42年助教授に昇任し、昭和44年アラバマ大学客員講師として1年間渡米、昭和63年教授に昇任されました。平成9年に本学を退職し、同年からは北海道女子大学（北翔大学）教授を務めました。

三谷名誉教授は、①家族協定を結んで労作的経営の安定化を図った北海道の農村家族研究を30代まで行い、40代からは②都市の3世代家族におけるイ

ンフォーマルな協力関係の調査を手がけ、50代以降は③都市における家族・親族のインフォーマルな協力関係と地域福祉資源による生活サポートの調査研究を中心とするようになりました。特に、第二期の後半と第三期においては科学研究費補助金を得て、都市間比較の大規模調査を実施しました。

関連する科研費の成果を一瞥すると、総合研究（A）1985-1987「都市家族の世代間関係に関する研究」（同居子・非同居子との関係を札幌・仙台・福岡で比較調査）総合研究（A）1991-1992「都市の家族関係と友人関係に関する研究」（インフォーマルなネットワークによる地域福祉）基盤研究（B）1995-1996「都市のインフォーマルな社会関係に関する研究」（中高年層のインフォーマルな親子・親族・近隣関係を札幌市と武蔵野市で比較調査）基盤研究（B）2000-2001「地域社会の変容とサービス施設構造に関す

る比較研究」（都市住民の高齢化と福祉コミュニティの形成）となります。

三谷名誉教授は研究・教育の傍ら、行政や地域運動とも密接に関わり、1990年から『創成川ルネサンス』運動に参加し、シンポジウムや創成川ウォークの実施、異業種・異分野の人たちと楽しみながら、現在の創成川緑地造成のランドデザインを行いました。

代表作は、三谷鉄夫 1988『現代都市家族論』都市家族研究会です。北海道大学文学部社会学研究室初代教授鈴木栄太郎以来の農村社会学・都市社会学・家族社会学の学統は、三谷名誉教授が指導した北海道内外の大学や研究機関で活躍する教え子たちに継承されています。

ここに先生の生前の功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(文学研究科・文学部)

### 名誉教授 <sup>いし</sup>石井 <sup>ただお</sup>忠雄 氏 (享年93歳)



名誉教授 石井忠雄先生が平成30年8月19日に逝去されました。

先生は、昭和22年9月に北海道帝国大学工学部応用化学科を卒業され、その後、昭和23年2月に北海道大学工学部助手に着任されました。民間企業に一時勤務された後、昭和33年12月に北海道大学工学部助教授に着任され、昭和42年10月には教授に昇任、応用化学第六講座（現在の固体反応化学研究

室）の初代教授を担当されました。昭和63年3月に北海道大学を退官後、平成5年3月まで苫小牧工業高等専門学校校長を務められました。

この間、先生は、北海道大学においては、無機工業化学、化学工学などの科目の講義及び研究指導により、多くの学生の育成に貢献されました。苫小牧工業高等専門学校においては、校長として教育研究組織・施設の整備、充実に尽力され、若手研究者の育成に貢献されました。

研究面では、工業反応速度論、反応工学、熱分析、放射化学などに基いて、無機工業反応や粉体間反応を中心とする広範囲な研究に従事されました。昭和36年には「接触式硫酸転化器の工学的解析」により、北海道大学から工学博士の学位を授与されました。150編以上の原著論文、解説論文、著

書を発表され、特許を6件取得されており、先生が独自に開発された高压又は気体流通式示差熱分析装置に対して、科学技術庁長官奨励賞及び発明協会発明賞を授与されています。

学外では、学術審議会専門委員、日本化学会北海道支部長、触媒学会評議員、また、日本熱測定学会においては応用熱研究会主査や第21回熱測定討論会実行委員長などを務められ、学術の発展にも大きく貢献されました。

平成10年秋には、これらの貢献により、勲三等旭日中綬章を受章されました。

先生の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(工学院・工学研究院・工学部)

## 編集メモ

---

● 9月を迎え、肌寒く感じる日も多くなり、秋の訪れを感じられるようになりました。キャンパスも徐々に色づき、秋の彩りが添えられはじめました。

● 広報誌「リテラポプリ第61号」を発行しました。

今月号の特集ページでは、“挑む”を

テーマに、「生命科学院ソフトマター専攻」、「観光学高等研究センター」、「理学研究院附属地震火山研究観測センター有珠火山観測所」を取り上げています。ぜひご覧ください。

◆ <https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>



2010.9.25 函館本線 倶知安～小沢（共和町）

## 北の鉄道風景 66 初冠雪を迎えて

夏が過ぎ去って秋が深まりつつある中、雪が無かった山岳の山頂付近が積雪によって、初めて白くなる状態を初冠雪という。この気象現象の発生日は、冬の到来を示す指標として利用されていて、その観測を担う気象庁では、日本各地の約80座の山々を初冠雪の観測対象としているのだそうだ。道内で最も早い初冠雪を迎えるのは大雪山系の山々であって、例年、9月中旬から下旬に初冠雪となる。一方で、手稲山や羊蹄山のような札幌近郊の山々は、標高が

低いこともあって、初冠雪となるのは例年、10月中旬以降である。写真は初冠雪の羊蹄山を背景に倶知安峠を往く「SLニセコ号」である。これを撮影した2010年、夏は記録的な猛暑であったが、冬の訪れは早かった。平年よりも早い9月下旬に羊蹄山の初冠雪が観測され、その1ヶ月後には、札幌市内でも初雪、それも多い場所では30cmを越える積雪となった。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ⑨ No.774 平成30年9月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html